帝國讀本

改制新版

卷四

375.9
Ha7
資料室

41598
教科書文庫
4
810
41-1938
2000301812

資料室

375.9
H27

文部省檢定濟
昭和十三年一月十一日　中學校國語漢文科

帝國讀本

改制新版

文學博士　芳賀矢一
文學博士　上田萬年
文學士　長谷川福平　訂補　編

合資會社　冨山房發兌

法隆寺

廣島大學圖書之印

廣島大學圖書

35398

帝國讀本 改制新版 卷四

目次

一 法隆寺の鐘……高濱虛子…一
二 長城の秋を尋ねて……南部修太郎…六
三 四方の海(明治天皇御製)……一四
四 明治天皇の御製に就いて……一六
五 白い國朝鮮その一……中村亮平…二一
六 白い國朝鮮その二……中村亮平…二六
七 日本人(詩)……西條八十…三三
南國と我が國民(自修文)……竹越與三郎…三六
八 美しい心……吉田絃二郎…四一

九　我が家の富……徳富健次郎…五三
一〇　鷹が渡る……野村傳四…五七
一一　本居翁の遺蹟……六三
一二　世渡る業……柳澤淇園…七一
　土器賣る翁……七一
　世渡る業……七三
　心の洗濯（自修文）……柴田鳩翁…七五
一三　案山子（川柳）……八〇
一四　篤實……橘南谿…八一
一五　杉浦重剛翁その一……小笠原長生…八九
一六　杉浦重剛翁その二……小笠原長生…九六
一七　國歌の話……田邊尚雄…一〇四
　元日（自修文）……夏目漱石…一一〇

一八　日章旗と水戸烈公……木宮泰彦…一一六
一九　清淨の國……大町桂月…一二三
二〇　心の境……窪田空穗…一二八
二一　自己に忠實なる者……島村民藏…一三三
二二　杉田壹岐……室鳩巣…一四二
　木村重成（自修文）……額田六福…一五〇
二三　我が袖の記……高山林次郎…一五七
　熱海の冬……一五六
　三保の春……一五八
二四　ふじの山（狂歌）……一六一
二五　哲人聖德皇太子……高島米峯…一六五

帝國大學圖書之印

帝國讀本 改制新版 巻四

一 法隆寺の鐘

高濱虚子

山門をはいると、すぐ右側に寫眞や、寶物の説明や、くさぐさの物が並べてあり、蒲團を掛けた小さい猫火鉢が置いてあつて、人は居らぬ。案内者が「八さあん」と呼んだが、返事がない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は默つて猿臂を延して、戸棚の横から長い鍵を出して、我等の前に立つた。我等は塔を見上げ、山門を見返りつゝその後について行く。案内者は金堂の横の扉に鍵を突込んで、コツ〳〵とこねくるが、どうしても

(一)法相宗の本山。奈良縣生駒郡法隆寺村にある。聖德太子の建立。

(二)俳人。名は清。明治七年(一八七四年)松山市に生れた。

猿臂を延す

あかない。鐘がゴーンと鳴る。案内者は鍵を突込んだまゝ鐘樓の方へ行く。見ると、二階建のやうになつてゐる鐘樓の下に、袴とも腰衣ともつかぬ物を腰に纏うた一人の男が、長い綱を持つて立つてゐる。我等も案内者の後について行く。男が綱を緩めたと見ると、鐘がゴーンと鳴る。「八さん、あけておくれ、わたしがその間撞いてゐるから」と、案内者は代つて綱を持つた。寺男は默つて綱を渡して、金堂の方へ走つて行つた。案内者は一、二、三、四と口の中で撞木の搖れる數を數へて、五つ目に綱を緩める。さうすると撞木が鐘に當る。ゴーンと鳴る。曾てフランスから日本の美術を調べに來てゐた人が、特にこの寺の鐘を褒めてゐた事を思ひ出す。見上げると、他

の寺の鐘樓とは違つて、鐘は露出してゐない。薄暗い所に、細長い形をした餘り大きくない鐘の、青錆が品よく古色を呈して附いてゐるのが、窓から射入る光線で朧氣ながら見える。撞木が鐘に當ると、ゴーン、ゴーウ、ゴーウ、ゴーウと、靜かに遠くへ傳はる響にも上代の音がある。余は堪らなくなつて、どうか僕にも一度撞かしてくれぬかと案内者に賴んで、敎はるまゝに一、二、三と數を繰りつゝ、五つ目に大きく引いて綱を放した。撞木が當る

法隆寺鐘樓

梵音

心耳を澄す

(一)俳人、漢詩人。姓は福田、靜處と號した。京都に住んで子規と交遊があつた。

には當つたが、纔かに音を發したばかりで、涼しい清い梵音は出なかつた。殘念に思つて、今一度と數を繰つて、また綱を緩めた。前よりは稍好い音を出したが、それでも心耳を澄す音ではなかつた。同行の把栗(一)が、「僕にも一つ撞かしてくれ」と、綱を持つて撞いた。同樣に力ない響であつた。漸く金堂をあけた寺男が歸つて來て、「そんな撞きやうをしてはどうもならん」と、綱を取つて代つて撞いた。鐘の音は再び澄んだ力のある音に復つた。

我等の撞いた鐘の音を、法隆寺の村人は何と聞いたらう。田を耕しながらその力のない音に耳を聳てて、佛力の俄にかくも衰へたるかと、定めて驚いた事であらう。しかし、それ

は唯三撞きであつた。四撞き目は再び元の音に戻つて、天日は舊の如く明らかになつた。あゝ、この靈鐘を瀆した罪は深い。しかし、法隆寺始つて以來、佛法の滅びるまで、この寺の鐘は何萬遍鳴る事であらう、何億遍鳴る事であらう。何億遍でもよい。そのうちの二遍だけは余が撞いた鐘の音だと思ふと嬉しい。若し次の世にこの罪深い余が、萬々一にも佛の國に生れるやうな事があるならば、それは確かにこの二撞きの鐘の音による事と信ずる。

この村はきぬたも法の響かな

(一)きぬた(砧、碪)

(一)小說家。仙臺市で生れた。昭和十一年歿、年四十五。
(二)大正十二年。
(三)支那河北省。今は北平と言ふ。
(四)北平と包頭(內蒙古)との間。今は平綏鐵道と言ふ。
(五)北平の西北五キロメートル。
(六)山海關から西へ向ひ、山を越え谷に跨がり甘肅省の嘉峪關に達する。延長二〇〇〇キロメートル。
(七)陰曆八月十五日。
(八)秦の始皇が北方の胡族の來襲に備へ爲に築かしめた。現存する物は主に明の時代の修築に係る。
突兀

二　長城の秋を尋ねて

南部修太郎

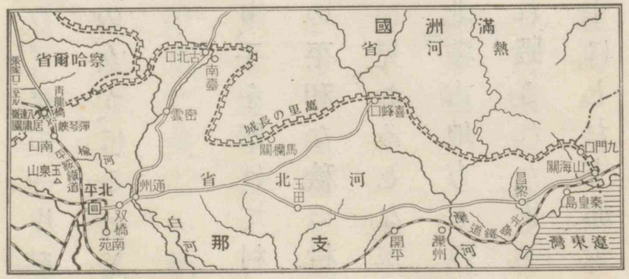
昨年の十月の初だつた、北京から京綏鐵道で一時間程行つた南口の南口ホテルに一夜を過した私は、友人の黃子明君と日本の學生三人との一行五人で、それ〴〵に驢馬に跨がり、日の昇つて間もない朝の六時にホテルを出發して、險しい七里の山路を萬里の長城へと志した。丁度支那の仲秋節の二三日前で、日本ならまだ菊の秋といふにも早い時分だつたが、北支那の秋はもうすつかり更けわたつて、空は高く深く紺青に澄切り、何となく體を引緊めるやうな冷やかな朝風も心地よく、仰げば突兀たる黃褐色の山々、秋枯れた

楊柳やポプラの林、農家の白壁と映えあふ赤い柿の實、谷間の小川の邊には草を食む羊の群、すべては蕭條たる秋の眺であつた。

千五百年前の築造だと言はれる居庸關(きよようくわん)の址を過ぎたのは十一時に近く、間もなくとある寂しい村外れの芝原に驢馬を乘捨てて、一行五人車座になりながら辨當を開いた。今は人の往き來も稀な寂しい山路に、異邦の私たちを見附け出した村人たちは、二人三人とまはりに群れ集つて、物珍しげに眺め、何かとさゝやき合ふのだつた。中には頭の禿げた、皺

(一)南口の北約一三キロメートル。有名な要害の地。

車座になる



だらけの顔に、人なつこい微笑を浮べてゐる老農夫もあつた。唐子姿の可憐な幼童を手招して、サンドウィッチの一片を分け與へると、その母親らしい淳朴な顔附の女が、にこ〳〵笑ひながら、「謝謝……」を繰返した。

食事を終ると、私たちは再び驢馬に跨がり、手を擧げて村人たちと別れの合圖を交し合ひながら、その平和な秋の村落をあとにした。彈琴峽(一)の深い谷間を右手に見おろしながら行くうちに、山路は漸く急になり、昔は朔北(二)蒙古(三)地方との交通路だつたらうと思はれる路も、今は崩れ毀されたまゝに、凹凸した石は驢馬の歩みを妨げる。鞭を手にした支那少年の驢丁は「イヽ、〳〵……」といつたやうな掛聲で、喘ぐ驢馬を

(一)居庸關を距る約一五キロメートル。昔清泉が石の穴に流れて彈琴の響を發したと言ふ。
(二)支那北方塞外の地。
(三)支那の北部。ゴビ沙漠によつて内外蒙古に分れる。

たてがみ(鬣)

峨々たる山

いたはる。始めての事、乘馴れない尻の据ゑ心地に膽を冷しつゝも、おとなしく靜かな足を運んで行く驢馬のたてがみに纏はるあぶを拂ふ餘裕をもつやうになつた頃には、互にあつばれな騎手氣取になる。谷を挾んで向ふも峨々たる山山だ。その麓を走る汽車も喘ぎながら、やがてトンネルの中に消えてしまふ。「ほら、長城が見えますよ」と、とある山陰を繞つた頃、日本語の巧い黄君は、私を振返りながら言つた。

おゝ、萬里の長城。それは振仰ぐ彼方の山の頂に美しい秋空を背負ひながら、高く誇らしげに聳えてゐるのだつた。私は思はず驢馬の手綱を引締めて、それにじつと見入つた。私の胸には、何かしら一つの感激が、波立たずにはゐなかつた。

山路を登り盡して路が平になると、驢馬は疾走し出した。乘馴れた私たちは、もう驚かなかつた。秋の眞晝ながら、山の氣は私たちの頰を冷たく吹拂つて行く。やがて青龍橋驛近(一)くの村落に出る。其所を過ぎると、路は再び急になる。椅子駕籠に乘つて歸つて來る西洋人の群に出會ふ。私たちは喘ぐ驢馬をいたはりながらも路を急いだ。そして丁度二時近くに八達嶺に達して、崩れた石門の前に驢馬を乘捨てた。年久しく思ひしのんでゐた長城は、所々朽ち崩れながらも、その二千餘年の生命を私たちの四五間向ふに横たへてゐるのだつた。

私は長城の一角に立つた。

(一)北平を距る七三キロメートル。この邊は山峽の風光がよい。

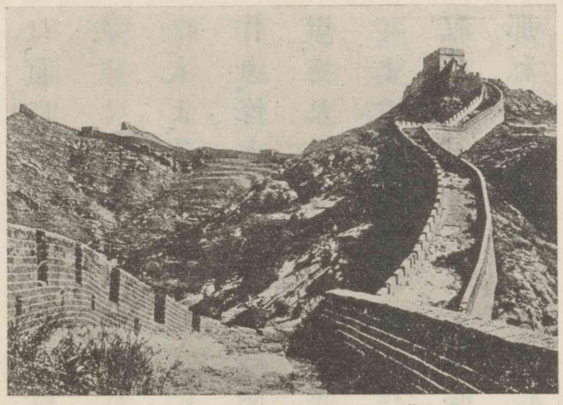
(二)青龍橋驛の西約二・六キロメートル。長城を大觀するに好適の地。

蒼穹

ひだ(襞)

荒涼索寞

蒼穹。其所には眼を遮る一片の浮雲もない。稍西に傾きながら、太陽は豐かな薄黄の光を投げてゐる。そしてその光の及ぶ所、北の狹い一角を殘して、秋枯れた暗褐色の山々が、ひだを織り、谷を作り、或は灰色の岩骨を見せながら、果てしなく重なり合つてゐる。しかも山容を彩る一本の木さへもないのだ。ほんたうにそれは何といふ荒涼索寞たる眺であらう。莊嚴と言ふには餘りに寂しい。美を叫ぶには餘りに冷たい。詩を求めるには餘りに嚴



萬里の長城

視野に入る

肅だ。眠れる、憩へる、いや、寧ろ死せる巨大な自然と言へば、最もふさはしいであらう。そして私の立つてゐる萬里の長城は、實にその自然の上に、蜿蜒たる姿を横たへてゐるのだつた。

人よ、想像して欲しい。高さ三四間、厚さ三間、所々に凸角を作り、烽火臺を築き、内側への暗路を設けた磚石と石との城壁。それが谷を下り、峯を繞り、岩角を攀ぢて、眼の及ぶ限り果てしなく、大波のやうにうねりながら延び續いてゐる眺を。私は自然の偉大さを思ふ。しかし、その眺が視野に入つた刹那、私はその自然の上に雄々しくも加へられた人間の力の偉大さに、深く〳〵胸を打たれた。眞にそれは感激讃歎以上

つち(鎚)

愚妄な努力

の驚異だつた。まして二千餘年前、その死せる自然のうちに營々と石を刻み、土を運び、つちを振つた人間たちの小さな姿を想像した時、それが今となつてはいかに空虛な、いかに愚妄な努力だと思はれようとも、私はその熱意の深さに涙を感じないではゐられなかつた。

私たちは城壁の上を低徊しながら、或は眺を恣にし、或は靜かな感懷に耽つた。そして一時間餘り過した後、何となく去難い氣持で石門の方へおりて行つた。

私たちが再び驢馬に跨がつて八達嶺をあとにした頃には、日影もいつとなく黄昏めいて、冷え〳〵とした山の氣が肌に冷たかつた。

三　四方の海（明治天皇御製）

四方の海みなはらからと思ふ世に
　など波風の立ちさわぐらん

かし原のとほつ御祖の宮ばしら
　たてそめしより國は動かず

照るにつけ曇るにつけて思ふかな
　わが民草のうへはいかにと

子らはみな軍のにはに出ではてて
　おきなやひとり山田もるらん

民草

世とともに語りつたへよ國のため
　いのちを捨てし人のいさをを

政いでて聽く間はかくばかり
　あつき日としも思はざりしを

よりそはんひまはなくとも文机の
　上には塵をすゑずもあらなん

さし昇る朝日の如くさわやかに
　もたまほしきは心なりけり

おのがじし

なりはひ

家とみてあかぬことなき身なりとも
　ひとのつとめにおこたるなゆめ

おのがじし務ををへし後にこそ
　花のかげには立つべかりけれ

おのが身を修むる道は學ばなん
　賤がなりはひいとまなくとも

とこしへに民やすかれと祈るなる
　わがよをまもれ伊勢のおほ神

四　明治天皇の御製に就いて

鴻業

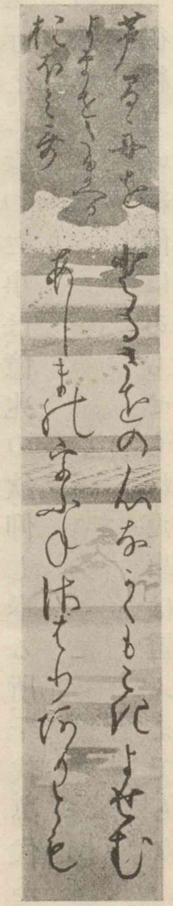
(一)藤原家隆。鎌倉時代の歌人。新古今集撰者の一人。嘉禎三年(一八九七)歿、年八十。

葦間の舟をよませたまへるおほみ歌

とるさをの心なかくもこきよせむあしまのをふねさはりありとも

(二)古今、後撰、拾遺、後拾遺、金葉、詞花、千載、新古今、新勅撰、續後撰、續古今、續拾遺、新後撰、玉葉、續千載、續後拾遺、風雅、新千載、新拾遺、新後拾遺、新古今の二十一續和歌集。

明治天皇の御製が十萬首もおありなさるといふ事は、あらゆる點に於て、東西古今の君主を凌駕し給ふ御事績の一として、驚歎し奉るより外はない。大天皇のすべての鴻業が神業である如く、これも一の神業である。古來、最多作の歌人と言はれた家隆卿(一)さへ、天皇に比べ奉れば、物の數でもない。歷代の勅撰(二)二十一代集の歌の數が總計三萬數千首、その幾倍の數を御一人でお作り上げになつたのは、眞に人間業ではない。かばかり多數な御製が最も多事な明治の御治世に



明治天皇御製
昭憲皇太后御筆

精力絶倫

言の葉の道

千代萬代かけての語草

於て、萬機御親裁の餘に成つた事を考へ奉れば、その御精力の絶倫であらせられた事、いつの世、どこの國にも類例はない。皇威を四方に輝かし、皇國を世界一等國の班にお進めあそばされた大業と共に、言の葉の道に於ても、空前の偉績をお示しになつた事は、億兆の欽仰し奉る所、千代萬代かけての語草である。

御精力の絶倫にあらせられた事は言ふまでもないが、かばかり多數な御作のあつた事は、平素何等の娯樂をも近づけ給はず、酷暑、嚴寒の時も、一度として遊幸の仰出もなく、常に宮中におはして、唯一の御慰となされたのが卽ち和歌であつたからである。これを思へば、實に恐多い事で、且またその神々しい御性格を窺ひ奉る事が出來る。御製を拜誦し奉る者は、一言一句、これが卽ち萬機親裁の餘、お寬ぎあそばされた御日常の御慰安であつた事を拜察しなければならぬ。

拜誦する

風調

動機

日常の御慰安の爲にお詠みあそばされた數々の御詠、その風調は高く、規模は大きく、いかにも萬世一系の帝祚を踐ませ給ふ上御一人の御作と窺はれる。國を思ひ、民を憐れませ給ふ大御心は、常に御製の上に現れてゐる。唯一首の御製が米國大統領ルーズベルト氏(一)を動かして、講和仲裁に盡力させる動機となつたといふ御逸話の如きは、三十一文字の和歌が、千萬の兵馬にも勝れた力を示したもので、和歌始つて以來未曾有な事である。まして九千萬の國民が日常拜誦

(一)第三十期の大統領。(西紀一八五八年―一九一九年)

して、自然に蒙る偉大な感化に至つては、何等の經典もこれに並ぶものはない。日々の御慰が直ちに國民教化の源泉となる、これ程の貴さが、いつの世、どこの國にあらうか。

明治時代の詔勅は森嚴雄大、永く國史を照して、後世の國民に聖代を語り、典範を示すものである。しかし、詔勅にはそれぞれの形式があり、聖意を承けて起草する人のある事も明白である。御製は直ちに大御心から發したもので、これを拜誦する者は、卽ち直接に玉の御聲を拜聽するのである。草莽の微臣まで、日々玉の御聲を拜聽する光榮を有するのは、實に我が國民の特殊な幸福である。

典範

起草する

玉の御聲

草莽の微臣

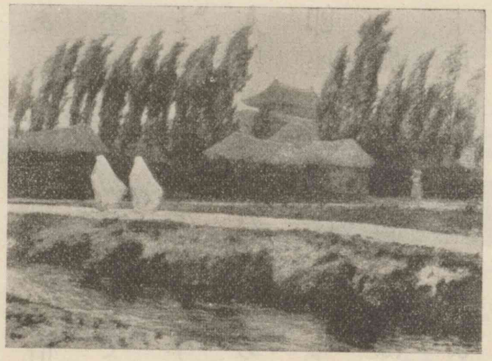
五　白い國朝鮮　その一

中村亮平[一]

(一)小說家、美術研究家。明治二十年(二五)四七年)長野縣に生れた。

宵闇

朝鮮と言へば純白の服裝を思ふ。それは夏の宵闇に、ふうはりと白い幻のやうに動く淸淨な姿であつた。



歸途（中澤弘光筆）

しかし、毎日白衣の人ばかり見馴れてゐると、その餘りな色彩の缺乏が、何とも言へない物足りなさを感じさせる。殊に秋から冬へかけての田舍の自然は、どこを見ても單調である。果てしもなく續く赭土と、稍調子が違ふ手近の壁と、くすんだ灰色の稾屋根との外、どこにも目に立つ變化がない。

市場　山口蓬春筆

全く色彩を取除けた世界といふ氣がした。

私は嘗て北陸を行脚して、加賀の金澤に足を留めた事があつた。軒並に見る格子戸や柱が一樣にくすんだ赭い色に塗られてゐた。そこでふと此所の舊藩主の上屋敷であつたといふ東京帝國大學の赤門(一)を思ひ出して、「赭き都金澤」と友人に書送つた事があつた。飜つて「朝鮮は」と問はれたら、私は卽座に「白い國、どこまでも白い國」と答へるであらう。

異境の誘惑と言はうか、半島のどこに旅をしても、市日(いちび)——市の立つ日が何よりの樂しみであつた。誰も知る大邱(二)の藥令市をはじめとして、京城(三)、平壤(四)、開城(五)等に大きな市が開かれるが、田舍の中心地でも、それ相應に賑はひ、なか〳〵盛な

(一)文政十年(一八二七)第十代將軍家齊の女が前田家に嫁した時建てられた。

(二)慶尙北道の南部。市は春秋二季にあつて、來會者は數萬に上る。

(三)朝鮮の中心都市。總督府所在地。

(四)平安南道の西南部。京城に次ぐ大都市。

(五)京畿道の西北部。約五百年前高麗の王都であつた。

地方色

ものである。一、六の日、或は二、七の日、または五の日といつたやうに、定期的に開市するのを例としてゐる。何を買はうといふあてもなく市場を散歩する程、興味のある事はなかつた。何しろ衣食住のすべてにわたつて、里人の生活に資する物が殘らず展開されるので、正に朝鮮民族の生活的縮圖である。內地の緣日露店といつた風であるが、もつと地方色が濃厚である。その日になると、白衣に黑い冠、白足袋に草鞋、ゴム靴といつたやうな扮裝の

開城市街

おしあひへしあひ

ひつそりと影を絶つ

ふきのたう（蕗薹）

ざる（笊）

群集が、朝から夕闇の迫るまで、おしあひへしあひする盛況は、縁日以上と言つてよい。それが夜になると、あれだけの人數がいつどこへ行つたか、ひつそりと影を絶つてしまふ。點燈の設備のない日中だけの市、我が王朝時代の昔を思はせるやうな、飽くまでも原始的な光景である。

春先、赤いチョコリ（上著）を著た田舍娘が、ふきのたうや蓬を摘入れたざるを携へて出て來るのを見受けるが、これを前に、市場の片隅に寂しさうにうづくまつてゐる姿は、いぢらしいと言ふよりも、寧ろ傷々しい場面である。

でも今では、冠を賣る店、草鞋を販ぐ店などは追々に廢れて、その代りに地下足袋やゴム靴が賣れ、鳥打帽や中折帽な

時代相

どが歡ばれる。この半島の一面にも、移り行く時代相が、この市場の小景に窺はれる。

超板戲

朝鮮の正月は實に長閑である。風俗習慣の違つた半島に、旅人らしく住むといふ、かゝはりのない氣持のせゐもあるが、毎日それは、冬らしい綺麗に晴れた爽かな日が續く。そのコバルトと言ふよりも、寧ろアルトラに近い色をした深い大空の下で、どこへ行つても超板戲（シヤンパンギ）のぎつこん、ばたんといふ異樣の響が、民家の庭から聞えて來る。まだうら若い娘たちが、原色に

反動

近い赤や青の單色の晴著を著飾つて、超板戯をしてゐる。これは古くから朝鮮に行はれてゐる遊戯で、殊に女兒が好んでするものである。中央に稾束のやうな枕を置き、それに板を載せて、稾束の反動と、上手にこなす全身の浮せ方とによつて、土塀よりも高く、家の棟よりも高く上る。常に深窓に閉籠つてゐる子女が、中天に身を浮す景趣は、さながら天使が天下つたかのやうである。昔から、年の始に超板戯の音を立てると、悪鬼が逃げてしまふと言はれてゐる。

それとは別に男の子は、氷の張つた上でパンイの勝負を爭つてゐる。パンイと言ふのは、内地のそれよりも一層原始的な形の一種の獨樂である。木で作つて、砲彈の上半部を切

落したやうな形で、軸がない。最初手で廻し附けて、それを鞭の先に附けた革紐か、細いテープやうの物で側面を打ちながら、勢を強めるのである。すつかり勢が附いた所で、敵のとかち合せて勝負を決める。その方法は、内地の子供のするのと變りはない。由來玩具のない朝鮮では、これが何よりの遊とされてゐる。

パンイ

以前には男の子は總角（チョンガー）と言はれて、三つ打ちにした長髪に赤いリボンを附けてゐたものであるが、今では切落して散髪にし、草鞋を脱いでゴム靴に穿きかへ、チョッキを上著の上に著て、すつかり現代風に變つて

ゐる。その子供が、氷の上ばかりでなく、床の上でも、地面でも、群がつてこのパンイをしてゐるのを見受ける。

六　白い國朝鮮　その二

年中行事隨一

正月には、朝鮮の大衆遊戯に索引（つなひき）といふ行事がある。陰暦の十五、十六日の月夜を徹して勝負を競ふのであるが、これも朝鮮らしい遊戯で、しかも年中行事の隨一とされてゐる。田舍町でも、直徑一メートルくらゐの繩を作る事は珍しくない。常に邑内を東西の二つに分けて置き、それによつて勝負を競ふのである。正月になると、幾日も前から繩を集め、藁の寄附を受けて、大繩を作り上げる。愈その日になると、出來上つた綱が競技場に運ばれる。東邑は東、西邑は西といつた風に、各の居住地の位置に別れて陣を取り、司令の作戰の下に行動する。東軍の綱の端に太い丸太をしつらへ、丁字形にして、西軍の綱の先に丸く作つた輪に引掛ける。引掛けるにも技巧があるが、その引き方にも、また腰をおろして持久戰を續けるにも、それ〴〵骨（こつ）があつてむづかしい。その日はどこも家を空（から）にして皆出拂ふ。老若男女、一村落の全部を擧げて力を爭ふ所に興味がある。しかもこの索引に勝てば、邑内の一年中の行事に常に先を制し、さては農作物までが豐作になると信ぜられてゐる。今ではその地方に住んでゐる内地人までが、一緒になつて勝負に力を入れてゐる。その睦ま

作戰

持久戰

先を制する

どら（銅鑼）

有頂天になる

應酬

文獻

しい光景は、いかにも氣持よく眺められる。

どらを合圖にすべての行動が開始される。徹宵して勝負がつかなければ、翌晩になつてまた續ける。愈、勝負が決ると、勝つた方は有頂天になつて踊り狂ふ。假裝行列をするやら、敵をからかふ唄を歌ふやら、敵、身方の別ちなく各の陣地、邑内を練歩く。茲に感心な事は、(一)敗軍の將は兵を語らずといつた形で、負けた方の邑民は、どんなに笑はれても嘲けられても、一言の應酬もしない。守るべき秩序は飽くまでも整然と守られてゐる。實に見上げたものである。民衆競技としてちよつと内地では見られない行事である。

古來文獻に乏しい朝鮮には、文學的傳承は誠に少いが、神

(一)「范蠡曰く、臣聞く、亡國の臣は敢へて政を語らず、敗軍の將は敢へて勇を語らず。」（呉越春秋）

話傳說に見る日本とのつながりには、殊に親密なものがある。羽衣傳說、松山鏡、瘤取、姨捨山傳說など、その他多くの我が國の昔話は、確かに朝鮮に由來があり、印度、支那から承けて我が内地への橋渡しの役割を務めた跡が、はつきり窺はれる。それにもまして優れた遺品を數多く存してゐるのは美術である。平壤附近の(一)樂浪の美術、(二)扶餘に於ける百濟の美術、(三)慶州を中心とする新羅の美術、高麗朝の美術、李朝の美術など、見るべき物が澤山ある。

演劇に就いて見ても、古い物では、タルツと呼ばれる假面劇を見ると、或時代のこの國の生活相が目の前に浮ぶやうである。元來一種の惡鬼除けの行事から變化して、貴人の宴

(一)漢の武帝が衛滿の朝鮮を滅して直轄領土とし、置いたその郡を一。樂浪郡は治の址は大同江の左岸の土城にあつて、其の古墳から數多の漢代の美術の遺物が發見される。

(二)忠清南道の南部にあつて百濟の舊都。今此所に墳墓、石塔などが殘る。百濟の藝術は我が飛鳥時代の源をなしたる。

(三)慶尙北道の東南部。此所の古墳からは豪奢な服飾品が發見される。

生活相

(一)京都市中京區の壬生寺で四月二十一日から五月十一日まで行はれる假面をつけた無言劇。

(二)朝鮮の士族で今も田舍では勢力がある。

席の餘興に行はれた、我が壬生(一)狂言めいた默劇である。題材は、兩班(二)の强欲を諷し、當時の僧尼の腐敗を戒めたもので、さながら高麗の民風を存してゐる。今も民間に「一番恐い者は何か」と問ふと、立所に「虎に乘つた兩班」と答へる習慣があるが、右の劇の筋と考へ合せて、民族的に根柢のある言葉であると思ふ。

惡鬼除けの假面劇

朝鮮に分布されてゐる動物中、虎は一番恐い者となつてゐる。虎の傳說を見てもなか〳〵多く、今でも山奥に入ると、牛や馬に鈴を澤山附けて、騷がしい音をたてながら歩いたり、夜になると松明を照し、時々大聲を擧げたりする習慣になつてゐる。しかし一方では、猛獸崇拜の遺風から、虎を「山君子」「山中の英雄」などといふ異名に呼んで、ひたすら崇めるといふ風習もある程である。朝鮮と虎とは、加藤清正の物語からしても、切離し難いものである。

(一)詩人、早稻田大學教授。明治二十五年(一八九二年)東京市に生れた。

七　日本人

西條八十(一)

心地よき名や「日本人」
文字は短したゞ三語。
さはれこの名を呼ばふ時、
身にしみ〳〵と傳ひ來る
わが感激のあやしさよ。

祖先の遺烈

心地よき名や「日本人」。
短き文字を誦する時、
肇國以來いや遠き
祖先の遺烈一瞬に、
わが肉身をやくを見る。

經綸

心地よき名や「日本人」。
住むは葭爾の一島嶼。
成すは世界の大經綸。
歐西に闇せまる時、
東亞にかざす大燈明。

盡未來

心地よき名や「日本人」。
あゝこの語こそとこしへに、
正義と愛の象徴ぞ。
あゝこの語こそ盡未來、
進取と意義の典型ぞ。
心地よき名や「日本人」。
われらこの名をうたふ時、
四隣をめぐる青海波、
この皇國に生れたる
われらの幸を祝福す。

——國民詩集——

(一)評論家、貴族院議員。三又と號する。慶應元年(二五二五年)越後國(新潟縣)に生れた。
(二)葡萄牙。
(三)儒夫を起たせる　いくぢない者を奮起させる。
(四)西紀一五五〇年—一六〇五年。
(四)新嘉坡。
後援　うしろだて。

自修文

南國と我が國民

竹越與三郎

ポルトガル貿易前後の古い文書を調べてみると、當時の我が國民の氣象には、實に儒夫を起たせるものが多い。イギリスのジョン・デービスといふ有名な航海者が、西紀千六百五年にシンガポール附近で日本人に殺された記事を見ると、いかに日本人が、當時國家の後援なしに勢威を振つてゐたかといふ事がわかる。ジョン・デービスは東印度會社の船數隻を率ゐて、シンガポール附近を航海してゐた。その時、九十人程の日本人が乘込んでゐる僅か七十トン許の日本船を見出した。——その記事によると、日本人は勇武な民であつて、彼等が來たといふ事だけで、シンガポール附近の民はもう慄び戰いたので、彼等は刀を帶びないでも濟んだのである。——これは多分海賊船であらうから、一應調査しよ

從順に　おとなしく。
掠奪　かすめとる。
阿修羅　戰鬪を好む鬼神。

うといふので、デービスはその船を呼止めた。日本人は從順にこれに應じて、悉く船内を見せた。米の外は何もないと言ふので、イギリス人は安心してゐると、その夜になつて、日本人が二三十人やつて來て、大きな英船を見せてくれと言入れた。その時、日本人は決して無事に濟ませる國民でないから、必ずこの船を掠奪する積りに違ないと言つて、「大いに警戒せよ」と唱へた者もあつたが、船長デービスは、この小日本人が何をするものかと言つて、油斷をしてをつたところが、案の如く、二十五人の日本人は船の中に入るなり、悉く阿修羅のやうに暴れて、一船の人を悉く追ひまくり、遂にデービスを斬殺して、今は船を奪はうとした。この時、下甲板の方から水夫が短銃を持つて來て、鬪つて、日本人を悉く射殺してしまつた。それから英船は日本船を砲擊したが、殘つてゐる日本人は一人として降參もしなければ、逃げもせず、悉く討死

土民　土著の住民。

(一)和蘭。

(二)暹羅。寄泊　船がゝり。寄航。

(三)シャムの首府。應募　募集に應ずること。

(四)駿河の人。寛永十年(一六三三年)シャムで歿した。

した。「日本人はいかにも勇武な民である」と、敵のイギリス人が書いてをる。この話は單に勇武の一例を擧げたのに過ぎないが、實際當時シンガポールあたりの土民は、日本人が上陸したといふと、一も二もなく降參したといふくらゐである。

また當時(一)オランダ人が日本に貿易に來るのに、多くは途中山田(二)でシャムに寄泊する。その時、病人長の水夫の補充を要する事があ政ると、(三)バンコックで廣告さへすれば、いつでも日本人が應募して來たといふ。その頃、一番多い時には、八千人の日本人がバンコックにをつたさうである。

シャムに於ける(四)山田長政の成功は、山田長政その人一人だけの事ではない。彼は無數の山田長政を代表したのに過ぎないので、當時この人の外に、無名の山田長政が多數にをつた事を知らなければならぬ。或時シャム王は、隣國との戰爭に日本人の從軍者を募つた。募に應じた者僅かに六人であつたが、この六人に日本服を著せ、日本刀を差させて先頭に立て、同じ扮裝をさせたシャム人を數百人これに續かせ、そしてその後にシャム服、シャム刀のシャムの兵隊を置いて、敵國指して進軍させた。日本人が加勢したと見た隣國は、直ちに降服したといふ。當時の日本人の勇武は、これくらゐ聞え渡つてゐた

南國の日本町（太田天洋筆）

のである。

唯勇武といふだけではない、シャムその他では、今日支那人のする仕事を、當時は日本人が澤山やつてをつたのである。若し德川氏が鎖國政策を執らず、海外の同胞を見棄てず、日本人が海外で屈辱を受けた場合には、せめて後押をしてその屈辱を雪がせるといふだけの事でもしたら、支那の沿岸からシャム、マレー半島、ボルネオあたりまでは、確かに日本の國旗が疾くに樹つてをつたらうと思ふ。然るに江戸幕府が國内の統一を急ぐ政策に誤られて、我が國民は今日のやうに退嬰の地位に立つ事になつたのである。思へば實に遺憾の至りである。

我が先代の國民は、當時幕府の壓迫を被りながらも、この通りに發展した。これは國民の自然の要求から出たものである。我が國民の歷史は、國民の利益や趣味が、南方と海洋とにある事を表

(一)馬來。
(二)馬來諸島中の一。世界第三の大島。イギリス、オランダに分領される。
退嬰　しりぞきまもること。

現してゐるのである。これに由つて將來を考へると、我が經濟策は南進に存せねばならぬと思ふ。我が國民の執らねばならぬ方針は、既に明らかになつてゐるではないか。

—三叉文鈔—

八　美しい心

吉田絃二郎(一)

紀伊見峠(二)を越えれば山は展け、紀の川(三)を挾んで秋の野は靜かに横たはる。紀の川を高野(四)の方へ渡鳥の群が飛ぶ。

高野口(五)、妙寺(六)、名手(七)市場(八)、粉河(九)などの町々が、紀の川に沿うて僅かに黑い町の屋根のみを、熟れきつた稻田の上に見せてゐる。幾筋もの山路が一樣に午後の日の光を浴びてゐる。路は杳然として煙つてゐる。遠い山に入る路を見るのははか

(一)小說家。名は源次郎。明治十九年(一八八六)四月佐賀縣に生れた。
(二)和歌山縣伊都郡。大阪、奈良、和歌山の一府二縣に跨がる。
(三)同縣同郡。上流は吉野川。大臺原及び高見山に發し、和歌山市の西北で海に入る。長さ一二〇キロメートル。
(四)高野山。同縣同郡。海拔九〇〇メートル。山頂に金剛峯寺がある。
(五)伊都郡高野口町。和歌山線の車驛。高野山まで一四キロメートル。
(六)同郡妙寺町。
(七)那賀郡名手町の字。
(八)同郡粉河町。

ないものである。いつとはなしに私もまた、をりからの滿山の紅葉を愛で、幽谷に小鳥の音を聽きつゝ高野の山路をたどつてゐた。私と前後して歩く夫婦連の遍路を見た。不動堂の前の苔むした石に休んでゐた時、遍路は默禮しながら通り過ぎて行つた。子を失つた悲歎に耐へないで、二人連立つて歩いてゐるのであらうか。「本來無東西、迷故在南北」の笠の文字を掠めるやうに、音もなき時雨は、やがて遍路の寂然たる姿を包んでしまつた。

夜は清淨心院の奥深く維盛を思ひ、秀次を懷ふ。山は霜に痩せて、軒に星の寒さを感ずる。

朝まだ暗いうちに起きて、かけひの水を掬む。水は骨を刺

默禮する

(一)奥の院へ行くの口に當る一の橋の近くにある寺院。

(二)平維盛。重盛の長子。平家の西奔に從つて屋島にあつたが、遂に高野山に至れり。落髮して牛婁郡藤縄に匿れ、終に一生を終つたといふ。

(三)豐臣秀次。秀吉の甥。秀吉の養子となり關白職を讓られ後高野山に入れまれて青巖寺に自殺した。年二十八。

す。御堂の方から既に誦經の聲が響いて來る。朝のうちに高野の寺々に詣で、午後は雛僧に誘はれて、杉並木の下を潛つて奥の院に詣でる。奥の院への兩側の大杉の木立が間に、光秀、三成の爲の供養塔を見出した。不運な二人の武將の爲に捧げられた施主すら知れぬ二基の塚を見た刹那、私は高野を訪ねた事を有難いと思つた。凡そ世に捨てられ、顧る者もない人々の爲に捧げられた塚程、人の心の麗しさを語る物はない。苔暗く黄昏れる頃、墓前に佇立して去る事を得ない

高野山奥院

(一)一の橋から摩尼山に至る二キロメートル餘の間。

(二)明智光秀。若狹の人。織田信長の臣。長事を以て信長を怨み、天正十年(一五八二)本能寺に襲うてこれを弑し、幾ばくもなく豐臣秀吉に破られて殺された。

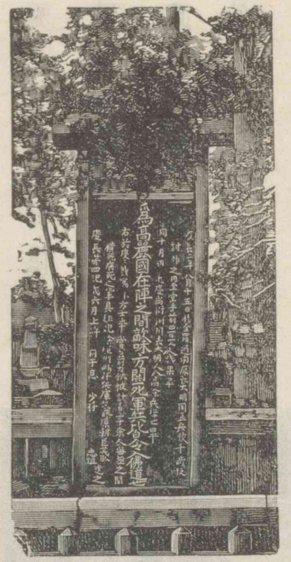
(三)豐臣秀次。秀吉の甥。秀吉の養子となり關白職を讓られ後高野山に入れまれて青巖寺に自殺した。年二十八。

のは、私一人ではあるまい。

杉の並木の邊には、芭蕉の

父母のしきりにこひしきじの聲

の句碑がある。



朝鮮陣敵身方供養碑

更に慶長四年[一]島津義弘父子によつて建てられた朝鮮陣[三]弔靈の碑を見るに至つて、旅人は古への日本武人の優しい心の有難さに魂を打たれる。この碑が一基ある爲に、高野の奥の院はどれ程印象深くされてゐるか知れない。

(一)第百七代後陽成天皇の御代。(一二一五九年)

(二)薩摩、大隅、日向三州の太守義久の弟。朝鮮の役に勇名を顯した。關ヶ原の役に石田三成に黨し、敗れて家康に降つた。元和二年(一六一六年)歿、年七十五。義弘の子は忠恆。

(三)文祿慶長の役。文祿元年(一五九二年)から慶長三年(一五九八年)に亙つて前後二回。

慶長二年八月十五日に於ける全羅道[一]南原の役、及び同三年十月朔日慶尙道[二]泗川の戰に於ける彼我數萬の戰死者の追福の爲に捧げられた物で、「敵身方鬪死軍兵をして皆佛道に入らしむ」といふ文字が見出される。洵に美しい武人の情ではないか。戰ふは義である。だが、討つも討たれるも、その主、その國の爲のみであつて、何の私怨があらう。

蓮月尼の[三]伏見鳥羽の戰に際して歌つた

義弘の仁愛（坂内青嵐筆）

(一)加藤清正、宇喜多秀家、小西行長等と敵將楊元との戰。

(二)島津義弘父子と敵將董一元との戰。

(三)明治元年(一八六八年)正月、幕府方と薩長方との戰。

きくまゝに袖こそぬるれ路のべに
　さらす屍は誰が子なるらん

といふ歌を想ひ出さゞるを得ない。

謙信の鹽を敵に送つた物語は餘りにも有名である。(一)阿倍野の戰に渡邊橋からせき落されて溺れる足利勢を救つた正行の慈悲心は、かの(二)「假の契を」の和歌の心と共に、不朽に傳へらるべき日本武將の心掛である。

攻めるも人、攻められるも人、殺すも人の子、殺されるも人の子である。その父その母の悲しみを思はゞ、誰か勇士の屍を秋風の吹くにまかせる事が出來よう。

河内國赤阪(三)の城の邊、二基の身方墳、寄手墳は誰が建てたかは知らぬが、此所にも美しい人の心が現れてゐるではないか。

(一)今大阪市住吉區。正平二年(一三四七年)十一月、楠木正行は細川顯氏、山名時氏の勢を此所に破つた。

(二)「とても世にながらふべくもあらぬ身の假の契をいかで結ばん」

(三)大阪府南河内郡赤阪村字水分。

身方墳

寄手墳

さるにても人は何故に人を殺さなければならぬか。墓邊日暮れて、蕭條たる山氣迫る。

蕭條たる山氣迫る

「今年の夏夜の八時頃、奥の院の前の橋の邊で佛法僧を聽きましたよ。」

と言ひながら、雛僧は足駄の音高く石だゝみの上を歩いて行つた。

雨催ひの空には星も稀であつた。

雨催ひの空

「寒いですな、今晩は……。」

暗い庫裏を通り過ぎて湯殿へ通ふ雛僧たちであらう。聲までが凍りさうな寒さである。

どこかできぬたを打つ聲がする。可なり急調なきぬたの打ち方である。山深く住む人々のわびしき心を思ひ出させる。

寢床に就いてもなか〳〵に眠れない。私の眼には朝鮮陣弔靈の碑の事や、芭蕉の句碑や、苔むした三成、光秀の供養塔が映つて來た。續いては曾て玄海(一)の孤島に見たロシヤ(二)の海兵の寂しい墓、日露戰役中に見た或月夜の光景が。

玄海の沖に砲聲を聽いたと思つてから數時間後の出來

(一)玄海灘。福岡縣博多灣外の荒海。
(二)露西亞。

事であつた。

八日頃の月が照つてゐた。海岸の叢には蟲が鳴いてゐた。海は煙つてゐた。私は突然靄の中に白衣の人々の長い行進を見た。いかにも靜かな行進であつた。死その物のやうな行進であつた。數時間前までは玄海の荒波を蹴り、敵、身方に分れて劇しく戰つた人々が、一つになつて濱を歩いて行くのであつた。

私は始めて戰つて來たばかりの人々を見た。戰に傷ついたばかりの人々を見た。まだ人々の上著にも袴にも生々しい血が流れてゐた。血の香が漂つてゐた。歩いて來る人間も歩いて來る人間も、血の氣を失つてゐた。

だが、それがつい數時間前までは劇しく戰つてゐた敵身方であると、いかにして想像する事が出來よう。

一人の傷ついたロシヤの水兵に、二人の日本の水兵が左右から肩を貸して、病院の方へ歩いて行つた。すぐその後から走り附いた一人の日本の水兵は、ロシヤの水兵の口に卷煙草をくはへさせてやつた。

くはへる（銜）

彼等は十年の知己の如くほゝゑんだ。

知己

一人の日本の水兵が一人のロシヤの水兵と腕を組みつつ歩いてゐるのもあつた。二人の日本の水兵が擔架を擔いで、大きな敵の水兵を運んでゐるのもあつた。彼等は恰も自分の親しい戰友が傷ついたかのやうな悲しみを現しつゝ、

戰友

靜かな足どりで病院の方へ歩いて行つた。

さしたる傷でもないのであらう、海岸の草の中にしやがんでゐるロシヤの水兵もあつた。その傍には若い日本の水兵がパンと水筒とを抱へてゐた。日本の水兵は手眞似をしては水筒の水を飲ませてゐた。

眞白な海軍服を著た人たちの靜かな行進は、海岸から山の上の海軍病院まで五六町の間も續いてゐた。蒼白い月がその白い軍服の行進を照してゐた。

沈み行く敵艦。玄海の波に溺れんとする三百幾十人のロシヤの水兵。木片を投げ、救命具を投げ、綱を投げて彼等を救ふ勇敢な日本の水兵たち。艦上に救ひ上げては自分等の上

人道的な行爲
無邪氣

著を著せ、毛布を惠む日本の水兵たち。しかもそのやうな人道的な行爲が、士官の命令によるのではなく、無邪氣な日本の水兵たちの自發的な意思からであつた事を思ふ時、私は日本人のもつ心の麗しさに就いて、感謝しないではゐられなかつた。

二十幾年前の海戰の日の光景が、はつきりと私の頭に浮んで來るのであつた。

「寒いですな。……」

私は再び庫裏の廊下を歩く雛僧たちの聲を聽いた。

私は明日の旅の事を思つたので、夜具をかむつて眠る事にした。

柝の音

(一)小説家。蘆花と號した。熊本縣の人。昭和二年歿、年六十。

永遠を思ふ

宇宙

廣い御堂に響く幽な柝の音は霜よりも寒い。

九　我が家の富

(一)徳富健次郎

一

家は十坪に過ぎず。庭は唯三坪。誰か言ふ、「狹くして且陋なり」と。家陋なりと雖も膝を容るべく、庭狹しと雖も仰いで碧空を望むべく、歩して永遠を思ふに足る。

神の月日は此所にも照れば、四季も來り、風、雨、雪、霰かはるがはる至りて興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆるなり。

須臾

二

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開きて樹に滿つ。風ある日には、薄青く霞める空より、白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散す。

（横山大觀筆）

隣家に花樹多し。風に隨ひて飛花我が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに滿庭花の衣を著く。子細に見れば桃の花あり、櫻の花あり、椿の花あり、山吹の花あり、李の花あり。

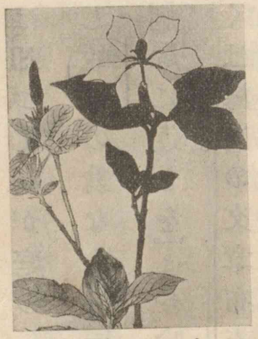
三

くちなし（山梔、梔子）

ゆがみ（歪）

滾々

庭の隅に一株のくちなしあり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、この花の我が家に開くは宜なりけり。



（萬花圖鑑所載）

老李の背後に一株の梧あり。碧幹亭々として少しのゆがみなく、我が如く直かれと教ふるに似たり。梧葉と手水鉢の側なる八手とは葉闊うして、我が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起りぬ。

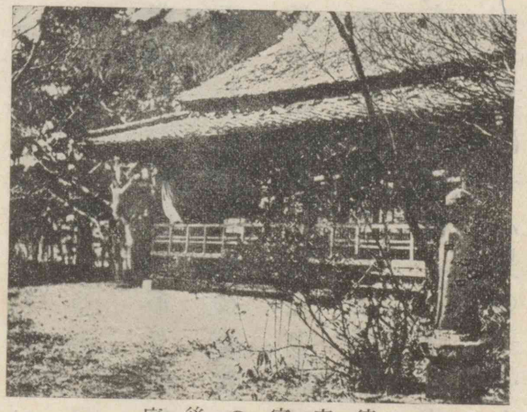
四

つく〳〵ぼふしの聲に世はいつしか秋に入りて、山茶花咲き、三尺許の楓も紅に燃出で、唯一株、前の家主の植ゑのこしたる黄菊も咲出づ。名苑の花美しと言ふとも、秋の哀れ閑寂の趣は、却つて我が庭の一枝にあるべし。蛻巖(二)の翁ならば、「獨り憐む細菊荆扉に近きを」とや吟ぜん。恥づらくは「海内の文章布衣に落つ」と唱すべき身にあらざる事を。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして滿樹金よりも黄なり。木枯の風起れば、その葉翩々として翻り落つ。半夜夢覺めて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も、庇も、手水鉢も、所として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落添ひて、寸金と人は言ふなる錦を、我は庭に敷詰めぬ。

(一)梁田蛻巖。明石藩の儒者。寶暦七年(一七五七)歿、年八十六。
(二)蛻巖の「九月九日」の詩句。

翩々



徳富家の後庭

五

木の葉落盡しては流石に寂しげなれど、日影月影愈多くなりて、空を見、星を見るに(陸)少きは嬉し。

一〇　鷹が渡る

野村傳四(一)

「鷹が渡る」と言ふ鋭い聲が、秋の空氣を突拔けて、村の一隅から起る。同じ聲が他の一隅にも起る。稻の穗波の黄ばみ渡

(一)英文學者、教育家。鹿兒島縣立圖書館長。明治十三年鹿兒島縣に生れた。

つた田の中からも起る。椿や竹の林に隱れた家からも起る。時は愁人の膚坐ろに寒い頃、渡鷹の一群が南を指して、秋の空を渡り行く偉觀は、余が故郷なる大隅の南端を除いては、日本國中何れの地にも見る事は出來ない。

雪寒き朔北の天地

嘗て余は黑潮の流を下つた事がある。流の早い海峽を通過した事もある。深碧の潮の流は直徑十數町に亙る一大圈を劃して、盛に渦を卷き、眞白な泡を表面に漲らして、汽船をも卷込み、岩をも押流すやうな勢で流れて行く。雪寒き朔北の天地から、椰子の葉青く風薰しい南洋の冬に渡つて行く一種の鷹は、正にこの潮流と同じく、大空を廻轉しつゝ進んで行く。そしてまた同じく偉觀である。

音を發すると間もなく空に吸込まれる花火の烟程の雲もない秋の空は、日本晴に晴れて、天上には祕密な隱家もない時、南を指して雙翼を伸したこの避寒客の數は、十萬か、五十萬か、はた百萬か知らぬ。初めひよくらゐに見えた一群の鳥は、高く舞上る爲に、障害物もない大空に、直徑數町もある一大圈を劃し始める。一隊が一廻轉したかせぬかといふ頃になると、ひよくらゐに見えた形が、雀くらゐに小さくなる。すると、一隊は一先づ南方へ流れ出す。夢のやうにすうつと飛んでは翼をせはしく使ふ樣は、はやぶさに似てゐる。暫くするとまた廻轉し始める。雀程の影は更に遠ざかつて、糠蟲程になる。更にまた流れ出す。かくして廻轉を繰返し行く間

ひよ（鵯）

はやぶさ（隼）

墨痕

隊伍肅々

神韻縹渺

に、一個々々の影は、青絹の上に落した墨痕のやうに見える。そして一隊が南へ去れば、後の一隊がその後を襲ふ。後の一隊が遠ざかれば、またその後の一隊がこれに續く。しかもこの大集團に一羽の外れる者もなく、聲を立てる者もない。恰も南より北に奔る天の川が、あらゆる星の影を掠めて、晝の間を逆に流れるが如くに見える。百萬の師が隊伍肅々として、萬里遠征の途に上る樣をも想像させる。神韻縹渺たる詩集の一卷を繙くやうな心持にもなる。

「鷹が渡る」と言ふ聲が、この時村のどこかに響き渡ると、直ちに全村の注意を引く。小學校の兒童は一同廣い校庭に飛出して、空を仰ぎ、手を拍ち、ぢだんだ蹈んで、「鷹よ、〳〵」と、小さい喉も張裂けるばかりに叫びつゝ、一行の首途を祝してやる。老人はもみを一杯に干した庭に滑りおりて、見えぬ眼を擦りつゝ青空を見上げて、過去幾十年の秋の記憶を繰返す。

首途を祝す

もみ(籾)

黄ばみ渡つた畑に立つ夫婦は、しばし鍬の手を休め、頭の手拭を取つて顏の汗を拭きつゝ、一度空を仰ぎ、互に相顧て、更に笑顏に一行を見送る。鷹は旅を急いで、どん〳〵南へ去る。見送る人の心は樣々であらう。

けゞんな

裏の畑に穗を啄む雞は、けゞんな顏を上げ、長く伸した首を傾けて、空中の壯觀を見る。今まで竹藪に火の附いたやうに騷いでゐた群雀は、ちゆ〳〵といふ一羽の合圖にぴたりと鳴りを靜め、ひれ伏して、笹蔭から天上の行列を送る。茅ぶ

きの屋根に秋の日を浴びて睦ましく遊んでゐた家鳩の夫婦は、遽しく我が巣に引籠つて、空を仰ぎ見る事すら敢へてしない。渡鷹の大奇隊は蠢々たる地上の影を顧もせず、悠々として南へ去る。かくて前後一二里に亙る大軍は、僅少な殿軍を除けば、時餘にして全く通過し、それより二三里を距てた地に蜿蜒として南方の空を壓する。五千尺以上の山脈を眼下に見、進んでは佐多岬(一)の燈臺を兒戯と觀て、洋々たる大洋を、昨日も今日もと南へ越えて行くのであらう。目的とする所は臺灣か、フィリッピン(二)か、但しは南洋の島々か。

「鷹が渡る」余は弱冠にして家を出で、故郷の秋に背くこと茲に十幾年である。しかし身は何所の境にあつても、この一

蠢々
殿軍
(一)鹿兒島縣(大隅國)肝屬郡。九州の南端。
(二)比律賓。臺灣の南方にある群島。
弱冠

語を想ひ起せば、直ちに故郷の遠山近嶽、山村水郭を背景として、渡鷹の大軍が一大パノラマの如く眼前に浮ぶ。眼を閉ぢても去らぬ。それと共に、幼時の秋の記憶は、余の腦裏に黒潮の如く渦巻き、渡鷹の如く廻轉する。

山村水郭

一一　本居翁の遺蹟

薄寒い朝風に面を吹かせて、野山の景色を眺め行く樂しさ。早稲田は既に刈盡したが、晩稲田は金色に波立つて、豐年の喜を見せてゐる。一里以上の路を往復するらしい一年生くらゐな小兒の連立つて行くのも、勇ましく心地よげに見える。尾花や野菊の交つてゐる疎な小松原の路を通つて、や

がて喬松の亭々と聳えた山の麓を過ぎる。あの山は何。この山は何。「御墓はあそこの山の茂みの所です」と車夫の語るのを聞きながら、いつしか山室に著いた。

車を捨てゝ爪先上りの坂路を上つて行く。繁つた木の間を流れる溪流の音、都に馴れた目や耳には清らかに珍しい。杉、松、しひなどで小暗い路を稍四五町も上つた所に、淨土宗の寺がある。妙樂寺と言つて、翁には深いゆかりある寺である。それから右へ左へと九十九折を喘ぎ〳〵六七町も上ると、古い木の鳥居があつて、十數段の石磴の上二三十坪くらゐが平地になつてゐる。その中央の小高い盛土が卽ち翁の墓である。上に櫻の木が一本、「本居宣長之奥墓」と題した墓石

(一)三重縣（伊勢國）飯南郡花岡町にある山。

しひ（椎）

(二)山室山の麓にある小寺。宣長の菩提寺。

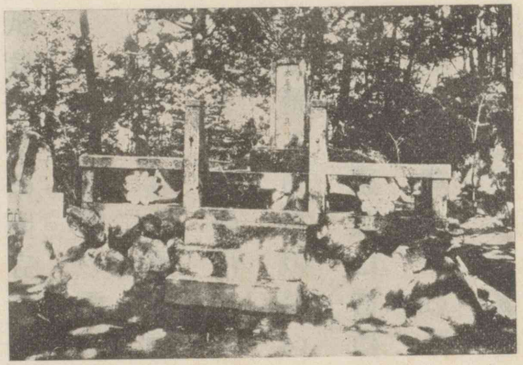
九十九折

がある。(一)山室山神社と言ふが、社殿も何もない。翁の墓の左手に圓い石があつて、(二)平田篤胤大人の

なきがらはいづくの
土になりぬとも
魂はおきなの
もとに行かなん

と刻んだのが立つてゐる。

篤胤大人は翁の歿後の門人で、生前に教を受けられた事はない。しかも數多の門弟子のうちで、ひとり翁の傍に侍つてゐられるのは、さぞかし滿足な事であらうと思ふ。この墓所はかの妙



本居宣長の墓

歿後の門人

(一)今、本居神社。

(二)江戸時代の國學者。國學四大人の一。秋田の人。（天保十四年〜三年）（一七五〇〜一八六三）歿、年六十八。

占定する

樂寺の持地面であつたのを、翁が懇請して、生前に占定して置かれたのである。その承諾を喜んで住僧に宛てられた手紙は、今なほ同寺で珍藏してゐるといふ。

やま室の山に千年のやどしめて
　風に知られぬ花をこそ見め

と詠まれたのはこの時である。二十年來、一日として翁の書物を讀まぬ事のない後進の一書生が、今始めて翁の墓前に額づいて感慨は眞に無量であつた。

百歳の世は隔つれど教へ子に
　かずまへませと拜みぬかづく

かずまふ

翁が歿後の門人は幾百萬の多きに上つてゐるであらう。

卓絶

その著書の卓絶な學術上の價値と、偉大な感化力とは、未來永劫に歿後の門人を作りつゝあるのである。世に學者の事業程偉大なものはない。

この墓所は山の頂にあるので、眺望の美しさは比類がない。青々とした伊勢の海を見はるかして、志摩、三河、尾張などの崎々、山々、近くは松阪(一)の町を眼下に見る。「富士の山もいつもは丁度あのあたりに見える」と、ホテルの主人は指さした。

見はるかす

(一)今松阪市。

千古に卓越した偉大な學者の奥城としては、誠にふさはしい場所である。

奥城

妙樂寺に入つて一憩し、翁の書幅を拜し、參拜名簿に記入などする。此所の眺望も誠に美しい。元來、翁の祖先の檀那寺

(一)松阪市街の西傍にある丘陵。
(二)鈴屋は翁の號。

稿本

襟を正す

舊態

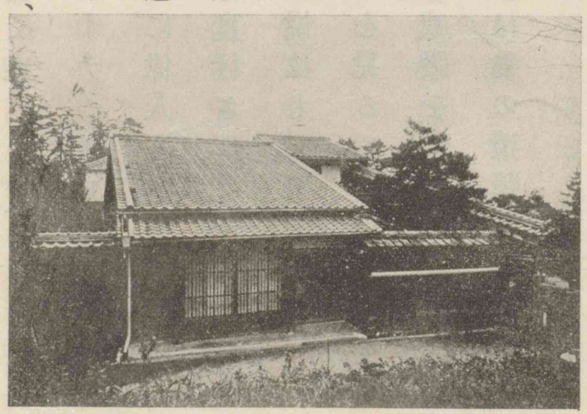
(三)今の戸主。翁五世の孫。

かまど(竈)

で、翁はをり〳〵此所に遊ばれたのである。

松阪へ歸つて城址(一)の公園に行く。此所に鈴屋(二)遺蹟保存會があつて、翁の舊宅がそのまゝで保存されてゐる。また新しい倉庫には、翁の自筆の草稿、遺愛の物、醫業用の藥箱なども陳列されてゐる。どの稿本も丁寧に綺麗に認めてあつて、翁が四十餘年の勤勉篤學、人をして襟を正さしめるに足る。舊宅はもと魚町にあつたのを、市中は火災の虞もあるから、保存會でこの舊城址の一角に移したのである。しかし、庭の樹木置石まで、一切舊態を存するやう苦心したといふ事で、本居(三)清造といふ表札まで、そのまゝになつてゐる。臺所のかまども、井も、便所も、舊のまゝの形が遺されてゐる。下が抽斗になつてゐる小さい梯子段を上ると、二階が四疊半の書齋、その床の柱に三十六の鈴が六つづつ六段に繫がれて懸つてゐる。(これは模造品で、本品は陳列庫にある。)これが卽ち翁が一切の著書の述作された場所で、この四疊半から日本全國を吹靡かす風が舞起つたのである。西向の窓から差込む夕日は、さぞ堪難かつたらうと思はれて、この質素な家居の樣が、愈〻翁の人格を大ならしめる。ドイツのワイマール(一)でゲーテ(二)

(一)ドイツの一都會。
(二)ドイツの詩人。(西紀一七四九年—一八三二年)



本居翁の舊宅

(一)ゲーテと並び稱せられるドイツの詩人。(西紀一七五九年―一八〇四年)

四望豁然

やシルレルの舊宅を見た時にも、その偉大な事業と、その質朴な家居の狀態との對比を面白く感じたが、この鈴屋の遺蹟には、一層その感を深うした。ゲーテ、シルレルの舊宅を見た時には、日本にもかういふやうに、偉人の遺蹟を保存したいものだと思つたが、今やそれが實行されて、先づこれを翁の舊宅に見る事を得たのは、誠に悅ばしい事である。

この公園は四望豁然、パノラマを見るやうで絶景であるが、翁の遺蹟を移して、更に崇高な威嚴を加へた。我が國に翁あるは我が國の誇。松阪町民の誇は、翁の遺蹟に越した物はない。

城の大手門を出でて數十步、縣社山室山神社がある。社殿、

返咲

ゐる

(一)大和郡山藩の重臣。名は里恭。寶曆八年(一七五八年)歿、年五十三。

土偶人

瑞籬が神宮風の樣式であるのは、一入嬉しく感じた。小春日和の麗かさに、このあたりの櫻の木が幾本となく返咲をしてゐる。宿の主人の話に、先年東鄕大將の來られた時も返咲を見られて、「流石に本居翁の鄕土故、櫻は一年中咲くのだらう」と言はれたといふ事である。

さくら木にゐりし百千の卷々ぞ
風に知られぬ花にはありける

一二　世渡る業

柳澤淇園(一)

土器賣る翁

伏見より年七十歲許なる老翁、土偶人、土器のたぐひを擔

人のゆきかひ

無心

ひて、洛中を賣りありくあり。常に商ふ家に來りて食事をするをりから、その家の奉公人大勢集り、かの翁に言ひけるは、「御身の擔ひたる物は、その價いか程ばかりの品にか」と問へば、翁答へて、「銀十五六匁程の荷なるべし」と言ふ。また問ふ、「京の町は人のゆきかひ繁き所にて、若し過ちて皆碎くまじきものにもあらず。さやうの時はいかゞする」と言へば、「それこそ過なれば、さる事なしとは言ふべからず。さあらん時はその事をありのまゝに陳べて、我等も年久しく商ふなれば、一荷くらゐは情にて借受けて商ひ申すなり」と言ふ。また問ふ「その上にもまた碎くまじきものにもあらず。その時はまたいかゞする」と詰り言へば、「いかに問屋なりとて、數度の無心も言難ければ、そのをりこそその許たちの如く、奉公なりとも致すより外にせん方なし」と言へり。

ふご(畚)

岩茸取（葛飾北齋筆）

世渡る業

木曾の山中など、深山幽谷にて岩茸を採るには、ふごといふものを造りて、綱を附けて、妻はそれに入りて、その夫樹々の枝より下げて、釣りおろし引上げなどして、谷間をあさるとぞ。下は幾丈とも限り知れざる所なる由、見し人物語れり。若し過ちて綱の切れて落ちたらんには、命なか

あはび（鮑）
かい（櫂）
もやい（舫）

るべし。また伊勢の海にて海人のあはび採るには、乳呑兒なんど引連れて、夫はかいを使ひゐて舟もやひするに、妻は海底に飛入り、此所彼所貝をもとむるうちに、兒の乳を尋ねてよゝと泣く聲の水底に聞ゆるにぞ、今一つ得まく思へど、兒の泣く聲の聞ゆるにひかされ、浮び出でて舟べりに取附き、息もつきあへず兒に乳を添ふる有樣、哀れにして、實に惻隱の心も起りぬべし。

惻隱の心

世渡る業さまゝ〳〵なる中に、かゝるすぎはひする輩もあるものを、家にありてその日を樂に過しつる身は、いと有難き事にあらずや。

——雲萍雜志——

自修文

心の洗濯

柴田鳩翁

江戸神田邊に、至つて貧乏な大根賣がありました。或日例の通り一荷の大根を擔ひ、朝早うから賣歩いたが、どうした事やら、その日は一把の大根も賣れぬ。日ざしを見ればはや晝すぎ、腹の時計は八つさがり、財布の中にはまだ一文の錢もたまらぬ。これはつまらぬ。この大根が暮方までに七百文の錢に化けぬと、忽ち明日は釜の中に蜘蛛の巣がはる。どうしたらよからうと工夫しながら、いつの間にやら兩國橋を渡り、本所の屋敷町を「大根、大根」と賣歩いた。

柴田鳩翁

或御屋敷の表長屋の窓の内から、「これ大根屋」と呼ぶ。やれ嬉し

(一)心學者。名は亨。京都の人。失明後、諸國を遊歷して道話を講じた。天保十年（一四九九年）歿、年五十七。
(二)今の東京市神田區。
日ざし　日のさしぐあひ。
八つさがり　午後二時過。ひどく腹のへつたのを言ふ。
釜の中に蜘蛛の巣がはる　たく米がなくなる。
(三)隅田川にかゝる大橋。
(四)今の東京市本所區。
屋敷町　武家屋敷の連なつてゐる町。

知行　こゝでは生活のもとでぐらゐの意。

月代　男子の頭髪を前額部から頂部へかけて圓く剃り落すこと。

鏡立　昔、鏡を見る時に鏡を立てかけたわくまたは臺。

泣歩く　困りきつてよび歩く。

かぶり頭。

や、先づ知行にありついたと、呼ぶ所を見れば、表御門から右へ三つ目の窓の内から呼んだのぢや。そこで大根屋が、表御門から荷を擔ひ込んで、お長屋へ廻つて見ると、門から三軒目の高塀の内、門口には何がしと表札が打つてある。

荷を持込んで見れば、縁先の障子をあけ、旦那殿が今月代を剃られたと見えて、鏡立に向うて自分の髪を結ひながら「その大根はいくらぢや」と言ふ。「百に三把で御座ります」と言へば、「それは高い。二十四文づゝにして置け」と言はれる。賣りたきは山々なれども、現在損のたつ事なれば、「どうぞ三把にお買ひなされて下され。今朝から江戸中を泣歩いて、まだ一把も賣りません。どうでも賣つて歸らねばならぬ大根、懸直は一切申しません」と言ふ。かのお侍かぶり振り「それでも高い。まからずば、先づよしにせう」と言捨てゝ、縁先の障子をはたと締められた。

しやうもやうもなく　どうともし方なく。

たらひ（盥）

ぬからぬ顏　油斷のない顏つき。

大根屋も色々と言うてみても、かのお侍が相手にならぬ。そこで、しやうもやうもなく、「はてつまらぬ。もう日の入には間もなし。何でも四五百の錢を持つて歸らぬと、親子五人が明日の命が繫がれぬ。何としたものであらう」と、手を組んで思案をしながら見廻すと、縁先の金だらひが、ふつと目に附いた。障子は締めてある。あたりに見る人はなし。かの金だらひを水の入つたまゝで、大根二三把の下にそつと隱す。怖いものぢや、今まで廣かつた世界が立所に狹うなつて、五尺の身體を暫くも置くべき所がない。

そこで荷を擔いで、門口を出ようとすると、障子の内から「これ大根屋」と呼びかけられる。ぬからぬ顏で「まかりません」と言ふと、「いや〳〵、直はねぎるまい。その大根買はう」と言ひ樣、障子をさらりとあけられた。

大根屋もびつくりしたが、どうぞして逃げて去なうと思ひ「何

絶體絶命（どうすることもできなくなること。）

われは（汝は。）きつう（ひどく。）

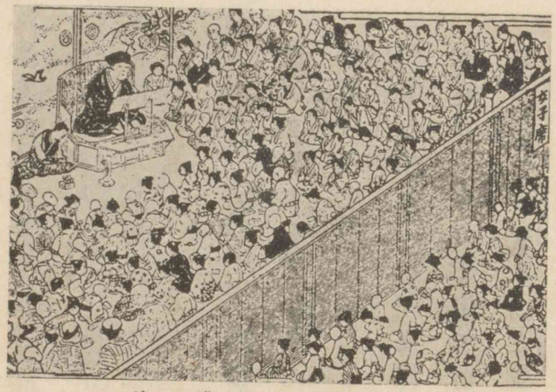
眞平（ひとへに。ひらに。）

把程いりまする。はした賣は出來ません」と言ふ。「いや〳〵、はしたでは買はぬ。その大根皆買はう。この緣先に並べてくれい」と言はれる。さあ大根屋も絶體絶命。障子の締つてあるうちなら、金だらひの出しやうもあらうに、今更金だらひが出されもせず。と言うて、賣るまいとも言はれず。逃げて行かうにも、荷を捨てゝ歸つてはならず。千百萬の後悔も、今になつては間に合はず、うろ〳〵としてゐると、かのお侍が、大根屋の顏をきつと見て、「われはきつううろたへてゐるぞよ。先づ金だらひから出して、大根の數を數へてみよ」と言はれる。大根屋は總身に冷汗を流して、もう斬られるか、ぶたれるかと、わな〳〵震へながら、かの金だらひを恥づかしさうにそつと出して、土に手を突き、「旦那樣眞平御免なされて下さりませ。何を隱しませう、先刻も申しまする通り、今朝からまだ一文の商も致しませず、このまゝ歸りますると、明日親子五人が

氣立（きまへ。性質。）

氣色（やうす。）

食べます事がなりません。悲しい貧の盜み根性、面目次第も御座りません。七つを頭に子供が三人、どうぞ親子五人の命をお助けなされて下さりませ」と、色青ざめて、土にあたまをすりつけて、詫言をする。



心學の講義

かのお侍、思の外氣立のよい人で、更に立腹の氣色も見せず、「いや〳〵、その詫言には及ばぬ。先づ大根の數をよんでみよ」と言はれる。こは〳〵ながら、大根を緣に積上げた所が二十三把。かのお侍、大根賣を呼んで、「さあ、その方が言ふ通りに、二十三把七百六十四文、ついでに金だらひを添へて遣す。貧の盜みとは言ひながら、われが根性は餘程汚

れてあると見える。この金だらひは顔や手足を洗ふ道具なれど、心の洗ひやうもありさうなものぢや。持つて歸つて、とつくりと思案をし、心の垢を洗ひ落せ」と言捨てゝ、障子を締めて內にはいる。かの大根屋もこれから本心になつて夜晝働き、三年目には遂に相應な八百屋になつたといふ事であります。——(一)鳩翁道話——

(一)鳩翁の講話を集めた書。九卷。

最短詩形の文學、

一三　案山子(川柳)

米つきをするとは見えぬ春の水
武者一人叱られてゐる土用干
轉寢(うたね)の顏へ一冊屋根にふき
本降りになつて出て行く雨やどり
よつびいてひようと放たぬ案山子かな
わらんぢを穿くと二足蹈んでみる
笑うたもあとからこけるすべり路
大佛は見るものにして尊まず
孝行のしたい時分に親はなし
泣く〳〵もよい方を取る形見わけ

一四　篤實

橘(一)南谿

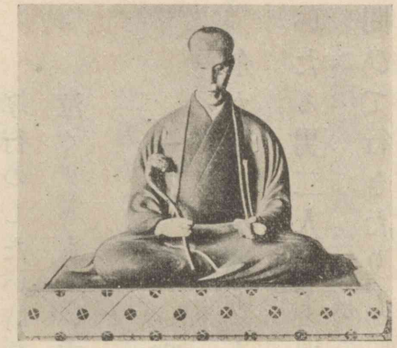
余が諸國を巡りて備後國を通りし時、百姓と見ゆる年老いたる男二人、ふと道連になりぬ。山の名、里の風俗など尋ね問ひて行きたりしに、その一人、我が野服を著し、方頂巾を戴きたるを怪しみて、「いかなる人にて、いづくよりいづくへ行き給ふにか」と問ふ。「我は都方の醫者なるが、醫術修業の爲に諸國を遊歷するなり」と答ふれば、「さてもたのもしき御人や。

(一)江戸時代の醫師、國學者、本名は宮川春暉。伊勢の人。文化二年(一八〇五)歿、年五十三。

野服

いぶせし

我等が住む里は向ふの山の奥なるが、親しき家の女房に奇妙なる難病ありて、はや二年になれるが、近きあたりに住み候へば、聞くもいぶせし。その家にても色々と醫療盡さゞる事はなけれど、露ばかりの驗もなく、今ははや危く見え候。かゝる山深き片田舎なれば、名高き醫師も候はず。あはれ都近くもあるならばなど、親類の者どもは歎き居り候。今日は圖らずも巡り合ひて、京都の御醫と承り候へば、親類どもが常々の詞も思ひ出されて、哀れにも候へば、何とぞ脈ばかりにても取らせ給ひて、彼等が心をも慰め給はらばや」と、誠の心言葉に出でて、また餘儀もなく見えたりしかば、余も「この道修業の事なれば、いと易き事なり」とうけがひて、かの者どものしりへに從ひて、尾道の二三里許此方より、右の方へ分入りぬ。



橘南谿

鹿、狼の通ふ如き細路を、谷に下り峯に上りて、行けども行けども程遠きに、日影もやゝ傾きて、腹饑ゑ、足疲れたれば、僕は腹立ちて「程も知れぬいたづら事」とつぶやく。とかうなだめて行く程に、やう〳〵に到り著きぬ。とある山あひのいと寂しき里にて、本郷と言ふ所なり。

その家に入れば、病者は五十許なる女にて、その夫を六兵衞と言ふ。案内の者しか〴〵の由を言へば、家内皆驚き悅ぶ。

うけがふ　(一)今廣島縣（備後國）尾道市。

病者は「去年の冬より難治の病に罹り候ひしが、次第に重りて、果ては腹裂くる心地して、苦しみ譬へん方なく、日々月々に病募り、春の頃よりは一入にて、横に臥せば下腹一入裂くるが如く、立てば苦しく、坐すれば堪難し。それ故、晝夜唯こたつの櫓に兩手をつかへ、立ちながら俯きてをる時のみ少し心安らかなるやうなれば、春以來はかた時も坐せず、臥さず、唯晝夜食ふにも、眠るにも、この通りなり。その苦しみなかなか申すも愚かに候。近き頃は殊に悪しく候へば、命の限りも遠からじと、一日も早く臨終をとのみ待居り候。命の事は助かるべくも思ひ候はねど、都の人と承れば、ゆかしくこそ候へ。何とぞ一日なりとも、この苦しみを助け給ひて、横に臥して安らかに永眠するを得しめ給はゞ、上もなき御惠」と涙を流せる樣、げに見るさへ哀れなり。晝夜立ちて俯きをれば、足は柱の如く腫氣ありて、顏もまた眼ぶち腫れ、額も浮きて、生きたる人の如くにもあらず。一しきり一しきり腹はり來る時は苦しみの聲隣を動かし、聞く者すら堪へかねたり。病體は誠にかくの如く危けれど、その脈に見所ありければ、急ぎ藥を與へ、なほ藥湯をもて腰より下を漬し、種々の療術を用ひしかば、やがて通利出で來て、始めて横樣に臥す事を得たり。なほしなゞの療治を加へ、この以後に用ふべき藥方を委しく書きしるし、用ひ方などまでも細かに傳へ置きて、その家を辭して、數里の深山を分出でて、三原の城下に著きぬ。

腫氣

(一)廣島縣(備後)國御調郡。淺野氏の舊城下。

三原にてこの物語をせしに、「さても危き事なりき。御心に誠ありたればこそ佛神の助もありて、誠の事に逢ひ給ふならめ。かくの如き事は、多くは盜賊の詐る事にて、旅する人を人なき深山に連行き、刺殺して金銀衣類を奪ふ事珍しからず。この後は必ず粗忽のふるまひし給ふべからず。」と言ひけるにぞ、始めて心附きて、恙なかりし事を喜びき。

粗忽

それより諸國を巡り、二年を過ぎて京に歸りゐたりしに、或日六條[一]の旅宿のあるじ訪ね來り、「一兩年以前、九州へ赴き給ひし御醫者はこなたなりや。」と問ふ。「いかなる用ぞ。」と聞けば、「備後國より六兵衞といふ百姓一人上り來り候ひて、『下に市の字の附きたる御醫師を聞及ばずや。何とぞ尋ねくれよ。

(一)今京都市下京區。

去々年しか〳〵の事にて高恩を受けたれば、御禮の爲に來りたり。その御名は聞かざりしかども、荷物のさげ札に市の字ありしを見覺えたり。』と申す。手がゝりもなき尋ねやうかなと存じ候へども、その志殊勝にも候へば、先づ表札を見巡りて市の字を見當て候へば、お尋ね申すなり。」と言ふにぞ、「その事あり。」と言へば、乃ち歸りぬ。その次の日かの六兵衞、旅宿のあるじと同道し來りて、備後疊を自ら持ちて禮物とし、「さても過ぎし年は不思議の御緣にて、妻なる者御療治に逢ひ、命はなきものと覺悟致し居り候ひしを、その日よりして驗を得、仰せ置かれし日限の如くに、さしもの難病も平癒して、再び常體の人となり候ひぬ。近所の者の行きあひより始り

て、御名さへ承らず候へば、弘法大師の來らせ給ふなりとのみ、一村にて評判致してこそ候へ。京を尋ねたりとも、逢ひ奉るべしとは圖らず候へども、命助かりし御高恩に、ひと言の御禮も申さゞる心のうちも安からず、若し逢ひ奉る事かなはずば、(一)東寺にても參り候うて、弘法大師樣へ御禮申して歸るべしと存じ極めて、參り候ひしなり。先づは尋ね當てて、日頃の本望を遂げ候」とて、眞實顏色に現れたり。余も嬉しくて、暫しもてなし慰めて、歸しやりぬ。都近くの者ならば、百里に餘れる海山を、いかではるゞ〳〵尋ね來べき。邊土の民の篤實なる事、感ずるにもなほ餘りあり。

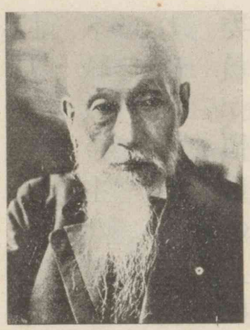
——西遊記——

(一)本名八幡山敎王護國寺。今京都市下京區。もと眞言宗の總本山、今眞言宗本山寺。弘法大師の言宗東派の仁海(一四八三年〜一四六九年)は敕旨によつて此所の長者となつた。

一五　杉浦重剛翁　その一

小笠原長生

昭和三年十二月十一日は、私に取つて何といふ感激の深い日であつたらう。それは外でもない、畏友杉浦重剛翁の墓に、畏くも久邇宮邦彥王殿下並びに同妃殿下が、成らせられた御事である。翁としてこれ程の光榮がまたとあらうか。私も墓前に於て殿下を迎へ奉つた一人である。遺族の人々は申すに及ばず、故人の親友や門下生に至るまで、一人としてその面上に感涙の流れてゐない者はなかつた。誠に翁のやうに、財もほしくない、生命もほしくない人は、普通人の二倍も三倍も感激性の深いものであ



杉浦重剛

(一)宮中顧問官、海軍中將、子爵。慶應三年(一八六七年)に生れた。家は舊肥前唐津藩主。

(二)敎育家。天台道士、梅窓と號した。滋賀縣の人。大正十三年歿、七十一。

(三)元帥、陸軍大將、昭和四年歿、御年七十七。

(四)御名は俔子。公爵島津忠義の第七女。明治十二年(一八七九年)御誕生。

るから、兩殿下が墓前にお進みあそばされた時の英靈の感激は、果してどんなであつたらう。

翁が東宮御學問所御用掛を拜命して、始めて御學問所に伺候したのは、大正三年五月二十三日であつた。これより先四月一日、東宮御學問所職員職制御實施と共に、東鄕總裁以下職員の主な者の任命はあつたが、翁の任命は五十餘日後れた。これは、倫理進講者の人選に就いて、東鄕總裁以下銓衡委員が、愼重の上にも愼重に考慮した爲であつた。

時代の推移

國士はある。精神家はある。皇漢學者もある。敬神家もある。が、そのすべてを備へて、同時に世界の大勢に通じ、時代の推移を看破する明を有し、科學的知識に富み、自由に外國語を解し、頑固ならず、また輕薄ならずと、かう數へ立てゝ、さて世間を見渡してみよ、果してこれだけの資格を完全に具備した人があるだらうか。先づないと言つてよい。しかし、ないでは濟まされない。是が非でも搜し出さねばならぬ。そこで總裁をはじめ一同額を鳩めて、熟議を凝した。その結果、唯一人立派な適任者を發見した。それが杉浦重剛翁である事は、事新しく言ふまでもない。

是が非でも

翁の歿後、私はその門弟で翁の進講に關して助手の役目を務めてゐた猪狩史山君から、御用掛拜命當時の翁の行動に就いて種々の話を聽き、また日記の一部をも見せてもらつた。そして今更ながら、翁の誠忠に驚き、思はず泣かされた。

(一)教育家。日本中學校々長。明治六年(二五)福島縣に生れた。名は又藏。三三年

翁は東宮大夫の濱尾男から、五月十一日に倫理進講の内談を受けると、暫時返答を猶豫せられん事を請うた。そして一方では、友人や門下生などの主な人々に一々意見を尋ね、一方では、靖國神社や松陰神社などに詣で、また乃木將軍、小村侯、佐佐木侯などの墓を展するなど、人間の成し得る限りに於て、お受けすべきや否やの覺悟を練つた。やがて愈、それと決心した際、

數ならぬ身にしあれども今日よりは
わが身にあらぬわが身とぞ思ふ

といふ述懷の一首をものし、且家人に對してかう言つた、

「杉浦は御學問所の御用の完了するまでは決して死なぬぞ。」

何といふ立派な覺悟であらう。翁はあのやうな蒲柳の質でありながら、果して八年といふ長い年月の間、殆ど病氣らしい病氣に罹られなかつた。實に人の一念程偉いものはない。

さうして、どうだらう、翁は御學問所の御閉鎖後、幾ばくならずして病床に就き、大正十三年一月二十六日、東宮殿下御成婚の慶典を擧げさせられてから、僅かに十八日を隔てた二

(一)名は新。後、子爵に陞され、兵庫縣の人。大正十四年七十七歳。

(二)東京市麹町區九段三丁目。九段坂上にある。別格官幣社。

(三)東京市世田谷區若林にある。府社。吉田松陰を祀る。

(四)外交官。名は壽太郎。宮崎縣の人。明治二十四年五十一歳。

(五)政治家。名は高行。明治四年五十七歳。

蒲柳の質

粒々苦辛誰又爭。登一時第一供神明。東湖一供時。正氣異無土。記西邦。憐不生。諸嘉穀到今養。忠義豐年自古鎭。民情可知國脈繫。于此宜矣傳稱瑞穗名。

大正乙卯之秋錄詠作一表奉祝意梅窓杉浦重剛

永久の眠に就く

月十三日に、永久の眠に就かれた。これ實に果すべきを果し、盡すべきを盡した理想的忠臣の終焉として、申分のないものではあるまいか。

活眼

翁が御學問所奉仕の際、東郷總裁は

「杉浦君は氣で生きてゐるのぢやから、氣に故障を起させないやうにすれば大丈夫ぢや」。

と言つて、翁の健康を保證された。私は總裁の活眼に敬服すると同時に、國士にして始めて國士を解するといふ事を、一層深く感じたのであつた。その東郷總裁を、翁の方ではまた次のやうに讃歎してゐる。

「現下の日本に於て、東郷さん程な東宮御學問所總裁としての適任者は他にあるまい。それは、英雄だとか、勇將だとかいふ點からではない。唯その終始一貫の誠實からだ。あの毎年の年末年始に行はせられる御終業式と御始業式との際、東郷總裁が御前に進んで、その學年の御成績や、將來に希望し奉る點を言上する時の様子には、つくづく感心させられる。地位、勳功共に高く、しかのみならず總裁の顯職にゐながら、鞠躬如たるあの態度の、何といふ奥ゆかしい事であらう。御學問所御開始の最初から八年後の御閉鎖の時まで、いつとても東宮殿下に言上するその聲が、ふるへてゐない事はなかつた。一度あの様子を見聞したら、その誠忠に打たれない者はないであらう。榮達して慎

鞠躬如たり

み、近づいて狎れない。こんな事は君子でなければとても出來る事ではない。私は從來種々の場合に出會つてゐるが、これ程奥ゆかしい感じのした事はめつたにない。」

私は翁の東鄕總裁に對するこの批評を移して、これを翁自身の覺悟としてもみたいと思ふのである。

一六　杉浦重剛翁　その二

翁の進講は、その範圍の廣かつた事驚くばかりで、皇道や國體などは申すに及ばず、世界の大勢、思想の潮流、軍器の發達、宗教の分布、科學の種類、自然界の現象などから、天文、地理に及び、更に謠曲、相撲にまで及んでゐる。さうして結局は、それ等のすべてに對して、帝王の御覺悟はかくあらせられますやうにと結ぶのを常としてゐた。それも、進講する各種の事を、それ〴〵斯道の權威者に就いて徹底的に研究してから申し上げるのだから、なか〳〵容易な事ではない。東鄕總裁の兩翼となつて御學問所に奉仕した濱尾、山川(一)の兩老も、翁の進講ぶりに滿足して、「これでやつと安心した」と、覺えず笑みを洩した。要するに杉浦翁は、口と共に心を以て進講した。心と共に身を以て進講した。翁はこれが爲に、いかに人間としての七情と苦鬪を續けられた事だらう。これは、菩提樹下に於て煩惱の惡魔を降伏せしめた佛陀の修行にも、をさをさ劣りはせぬ。隨つて、其所には杉浦もない。肉身もない。唯をさ〳〵

(一)名は健次郎。理學博士、男爵。福島縣の人。昭和六年歿、年七十八。

純なる日本臣道が、人間の姿を借りて現れてゐるのみである。かくして東宮殿下の御德は、翁の啓沃によつて、日に月にその御光を添へさせられたのであつた。

「莊嚴にして雄大なる君德をば、御參考となるべき古今東西の格言及び實例に就きて御進講申し上ぐるに、たゞに善くその要領を御會得あそばさるゝのみならず、御自發の御見識の高邁にわたらせらるゝ事、ひたすら欽仰するの外なし。身、常侍の職にあらざるを以て、御平素を詳知する能はずと雖も、觀察の及ぶ限りに於ては、一々御實行あそばさるゝを見るなり。不肖三十八年間高等普通教育に從事し、萬を以て數ふべき天下の英才に接觸したれども、

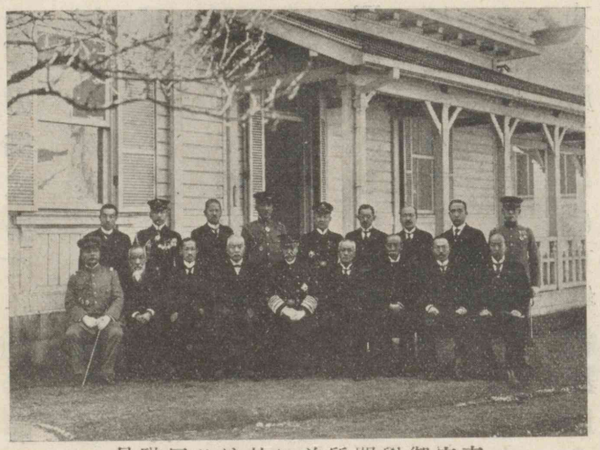
(一)今上陛下。

たゞに(啻)

見識高邁

未だ曾て見ざるところの御性格なり」。

言外に溢る



東宮御學問所前に於ける同職員

これは、大正八年四月二十九日東宮殿下滿十八歳に達し給ひ、同年五月七日賢所大前に於て御成年式を執行はせられた當日、杉浦御用掛が公表した謹話で、その感激の狀が言外に溢れてゐる。

月日は流れて、御修學年限たる七年はいつしか經過し、殿下には大正十年二月十二日を以て、御豫定の全科を御修了あ

無限の感に打たれる

たゝふ(湛)

らせられ、同十八日いとも嚴肅に御修了式を擧げさせられた。その御式場に於ける東郷總裁の言上は、言々句々莊重を極めたが、畏くも御傾聽の體を拜したので、參列諸員は何れも無限の感に打たれた。別けても杉浦御用掛は兩眼に涙をたゝへて、頭を垂れてしまつた。

同御用掛の倫理進講度數は、前後合して實に二百八十一回に及び、これに關して手記した材料の稿本は、積めば鴨居に達するであらう。

御修了式後三日を經た二月二十一日午前十一時四十分、東宮殿下には東郷總裁以下御學問所職員一同に拜謁仰せ付けられ、左の令旨を賜はつた。

もらふ(貰)

(一)東京市淀橋區淀橋。

今回御學問所の學業滯なく修了し、誠に喜ぶ。數年間、總裁以下職員一同の懇篤なる勤勞を深く謝す。

洵に恐多き極みで、一同感激に堪へなかつた。

それから數日の後であつた、私は御學問所に於て色々と翁の指導を受け、殆ど先生として仰いでゐたので、その謝意を表し、旁〻記念の字でも書いてもらはうと思つて、例の如く淀橋(一)なる日本中學校の校長室を訪問した。すると、事務員が私を迎へて、「先生は少々風邪の氣味で、今日は出勤されません」といふ事であつたから、それでは、どんな樣子か、私邸に往つて見ようと、すぐ側のお宅を尋ねた。すると、顏馴染の書生さんが出て來て來意を聽き、奥にはいつたが、やがて再び現

れて、「失禮ながら病室でお目にかゝるさうですから、お通り下さい。」と告げた。よつて、書生さんの後に續いて病室に入つて見ると、翁は床の上に起直つてゐて、「やあ。」と平素の如く元氣な聲で呼びかけられた。が、どうも顏色が良くない。そこで一應あいさつが濟んでから、

「もう病つたんですか、餘り現金ですね。」

と冗談半分に言ふと、翁は强ひて笑顏を作つて、

「なに、大した事ぢやありません。ほんの鼻風邪です。しかし小笠原さん、色々お世話になつたが、重大な御奉公が濟んで、御同樣こんな有難い事はないですな。杉浦など、御指導申し上げたなどとは以ての外で、始終御指導を仰いでゐるやうな氣がしてね。唯もう戰々兢々と、寢ても覺めても……だが、恐れながら滿點以上であらせられるので、杉浦も始めてどうやら及第したやうな安心を感じましたよ。」

と言つて、遙かに高輪(一)の方に向ひ拜伏された。稍あつて翁は腕をまくつて私の前に出し、

「これを見て下さい。」

と言はれた。あゝ、その腕は本當に骨と皮ばかりで、握つてみると、肱の邊でも私の指で樂に廻り、しかも氷のやうに冷たかつた。私はこれを放すに忍びず、握つたまゝ、じつと翁を見詰めた。翁は眼を塞いだ。

(一)東京市芝區。當時、高輪御殿が東宮御所となつてゐた。

一七　國歌の話

田邊尚雄[一]

(一)音樂學者。國學院大學教授。明治十年(一八七七)大阪市に生れた。

一國の音樂がどれ程その國の人情に左右されるかといふ事は、國歌などを見ると最もよくわかる。實に國歌の比較は、一面には國々の國體を比較する事にもなり、またその國民の氣風性質などを知る便りともなる。今試に西洋の三大音樂國と言はれてゐるイタリー、フランス、ドイツ三國に就いてその國歌を較べてみよう。

貴族的好尚

平民的傾向

最初先づフランスの國歌「マルセーエイズ曲」に就いて考へてみると、これには貴族的好尚に對する反抗が表れてゐて、甚だしく平民的傾向を帶びてゐる。隨つて國歌の上には

剽悍

理性

皇室中心主義

尊嚴といふものがない。そのかはり感情は實に遺憾なく表れてゐる。一體感情を極端に表すといふ事が、フランス音樂の一つの特徴となつてゐるのであるが、この國歌には、殊にそれが著しい。この意味で、マルセーエイズ曲は、眞にフランス人民を代表する國歌としてふさはしいものである。

次にドイツの國歌を見ると、これは全くフランスの反對である。ドイツ國民は頗る剽悍勇猛であると同時に、また理性が明らかで、徒に感情に走らない。隨つて感情中心のフランス音樂などとは大いに違つてゐる。この國には古來愛國的歌謠が頗る多いが、その愛國心といふのが、また我が國や、イギリス、ロシヤなどと甚だ違つてゐる。我が國は全然皇室

中心主義であつて、愛國といふ事は、卽ち皇室を尊重する事である。然るにドイツの愛國は、自國が他國に對して戰勝を得る事を喜ぶといふだけの思想から起つた愛國心である。隨つて國歌には、我が國のやうに皇室尊崇などと言ふよりは、他國に對する示威を旨としてゐるやうな趣が認められる。この點がドイツ國歌の特徵である。それは國民歌たる「ライインの守」、及び同じく國民歌たる「ドイツ人の祖國やいづこ」を見るとよくわかる。かやうにドイツの國歌とフランスの國歌とを比較すると、ドイツのが示威的であるのに反して、フランスのは反抗的である。ドイツのが理性的であるのに反して、フランスのは感情的である。實にこの兩國の國歌を

(一)「聲は雷の如く劍の響と波の音とに交りて聞ゆ。ライインよ、ライインよ、國の守は立てり、堅固に、且忠實に。」

(二)「ドイツ人の祖國やいづこか。ブロシヤか。ワビヤか。たはかの葡萄の實のるかぐわしき濱か。バルチツク泳ぐ岸のかもめか。否、否、否、我が國は更になるべし。」

(三)「ライインの守」は國歌。「ドイツ人の祖國やいづこか」は國歌。

見ただけで、かの歐洲大戰爭の光景が、目に見えるやうに感じられる。

飜つてイタリーはどうであるか。普通イタリーの國歌と言へば、「ロイヤルマーチ・オブ・イタリー」と稱せられる軍歌風の進行曲であつて、歌ではない。これはなか〳〵面白く、愉快に出來てはゐるが、尊嚴といふ感じは少い。餘り巧に作り過ぎてあつて、國民の眞情が流露してゐない。これは全くこの國の歷史によるものである。イタリーが現今のやうに統一されて帝國となつたのは、今から僅か七十年程前であつて、その時から始めて國家といふ觀念が急に勃興し、隨つて愛國の歌謠も現れて來た。國歌のロイヤルマーチはこの時に

(一)西紀一八六一年。

生じたのである。けれども元來永い間の精神修養によつて出來た愛國心ではなくて、歷史上の變動の爲に急に現れて來たものであるから、どうも國民の眞情が流露してゐない憾がある。且またイタリーでは從來音樂が頗る發達して、作曲法の技も進んでゐたものだから、國歌が內容よりも寧ろ形式に流れてしまつて、國歌としては餘りに曲が上手過ぎ、飾り過ぎてしまつたのである。

さて日本の國歌はどうであらうか。「君が代」は宮內省雅樂部の林廣守(一)の作曲で、割合に新しいものであるに拘らず、イタリーのとは大いにその性質を異にしてゐて、非常に尊嚴なものである。今日我が國の國旗なる旭日の意匠と、國歌な

(一)宮內省雅樂部副長。大阪市の人。明治二十九年(一八九六)歿、年五十六。

る「君が代」の旋律とは、確かに世界に對して我が國の威嚴を示す表徵となつてゐると言つてよい。「君が代」の作曲は一度外國人が手を著けたけれども、不成功に終つた。その後、林氏が全然古代の雅樂に則とつて作られたのが、現今の「君が代」である。我が國の國歌が、かゝる宮中の雅樂師、林廣守かもその老輩の手に成つたといふのは、ちよつと異樣であるが、實はそれが我が國の大幸福であつたのである。

一體我が國上代の音樂は、眞に大和民族の眞情を流露した音樂である。かの神武天皇御作の久米舞などは、いかにも

雄大且莊嚴なもので、これを宮中の饗宴に於て拜する外國の使臣は、皆その結構の偉いのに驚歎するといふ事である。かやうに大和民族本來の特性を失はずに、それに最もふさはしい形式の備つた音樂が、いはゆる雅樂である。さうしてこれを大體保留して傳へてゐた宮中の雅樂師が、「君が代」を作曲したのであるから、それが大和民族本來の性情を具へてゐて、しかも形式に於て可なり立派なものであるといふのは、當然な事である。

(一)小説家。名は金之助。東京市の人。大正五年歿、年五十。

自修文

元日

夏目漱石(一)

雑煮を食べて書齋に引取ると、暫くして三四人來た。何れも若い男である。そのうちの一人がフロックを著てゐる。著なれないせゐか、メルトン(一)に對して妙に遠慮する傾がある。あとの者は皆和服で、且不斷著のまゝだから、とんと正月らしくない。この連中がフロックを眺めて、「やあ〳〵」と一つづゝ言つた。みんな驚いた證據である。自分も一番あとで、「やあ」と言つた。

フロックは白い手巾を出して、用もない顏を拭いた。さうして頻りに屠蘇を飲んだ。ほかの連中も大いに膳の物を突つついてゐる。所へ虛子(二)が車で來た。これは黑い羽織に黑い紋附を著て、極めて舊式にきまつてゐる。「あなたは黑紋附を持つてゐますか。やはり能をやるからその必要があるんでせう」と聞いたら、虛子が「ええ、さうです」と答へた。さうして「一つ謠ひませんか」と言出した。自分は「謠つてもよう御座んす」と應じた。

それから二人して「東北」を謠つた。餘程以前に習つただけで、殆

(一)フロックコートの服地。

屠蘇　新年に飲む酒に浸す藥。屠蘇延命散とも言ふ。此所では屠蘇酒を浸したこと。元旦にこれを飲めば一年の邪氣を避けて齡を延すと言はれる。

(二)俳人高濱虛子。きまつてゐる　きちんとをさまり返つてゐる樣を言ふ。

曖昧（はつきりしてゐないこと。）

素人（專門外の人。）

ど復習といふ事をやらないから、所々甚だ曖昧である。その上、我ながらおぼつかない聲が出た。漸く謠つてしまふと、聽いてゐる若い連中が、申し合せたやうに、自分をまづいと言出した。中にもフロックは「あなたの聲はひよろひよろしてゐる」と言つた。この連中は、元來謠の「う」の字も心得ない者どもである。だから虚子と自分との優劣は、とてもわからないだらうと思つてゐた。しかし、批評をされてみると、素人でも理の當然な所だから已むを得ない。「ばかを言へ」と言ふ勇氣も出なかつた。

石漱るけ於に齋書

所望（のぞむこと。）

斬新（目新しいこと。）

紋服（紋附の著物。）

すると虚子が、近來鼓を習つてゐるといふ話を始めた。謠の「う」の字も知らない連中が、「一つ打つて御覽なさい。是非お聞かせなさい。」と所望してゐる。虚子は自分に「ぢや、あなた謠つて下さい。」と依頼した。これは囃の何者たるを知らない自分に取つては、迷惑でもあつたが、また斬新といふ興味もあつた。「謠ひませう。」と引受けた。虚子は車夫を走らして、鼓を取寄せた。鼓が來ると、臺所から七輪を持つて來さして、かん〳〵いふ炭火の上で、鼓の皮をあぶり始めた。みんな驚いて見てゐる。自分もこの猛烈なあぶり方には驚いた。「大丈夫ですか。」と尋ねたら、「えゝ、大丈夫です。」と答へながら、指の先で張切つた皮の上を、「かん」と彈いた。ちよつと好い音がした。「もういゝでせう。」と七輪からおろして、鼓の緒を締めにかゝつた。紋服の男が赤い緒をいぢくつてゐる所が、何となく品がよい。今度はみんな感心して見てゐる。

領承する　承諾する。

萎靡因循　氣勢が鈍つてぐづ〳〵すること。

矢庭に　だしぬけに。

虛子はやがて羽織を脫いだ。さうして鼓を抱へ込んだ。自分は「少し待つてくれ」と賴んだ。第一、彼がどこいらで鼓を打つか、見當がつかないから、ちよつと打合せをしたい。虛子は、此所で掛聲をいくつかけて、此所で鼓をどう打つから、おやりなさいと、懇に說明してくれた。自分にはとても呑込めないけれども合點の行くまで研究してゐれば、二三時間はかゝる。已むを得ず、好い加減に領承した。そこで「羽衣」の曲を謠ひ出した。「春霞たなびきにけり」と半行程來るうちに、どうも出が好くなかつたと後悔し始めた。甚だ無勢力であるけれども途中から急に振ひ出しては、總體の調子が崩れるから、萎靡因循のまゝ少し押して行くと、虛子が矢庭に大きな掛聲を掛けて、鼓を「かん」と一つ打つた。

自分は虛子がかう猛烈に來ようとは、夢にも豫期してゐなかつた。元來が優美な、悠長な物とばかり考へてゐた掛聲は、まるで

威嚇する　おどかす。

眞劍勝負のそれのやうに、自分の鼓膜を動かした。自分の謠は、この掛聲で二三度波を打つた。それが漸く靜まりかけた時に、虛子がまた腹一杯に橫間から威嚇した。自分の聲は威嚇されるたびによろ〳〵する。さうして小さくなる。暫くすると、聞いてゐる者がくす〳〵笑ひ出した。自分も內心からばか〳〵しくなつた。その時フロックが眞先に立つて、どつと吹出した。自分も調子につれて、一緒に吹出した。

それからさん〳〵な批評を受けた。中にもフロックのは最も皮肉であつた。虛子は微笑しながら、し方なしに、自分の鼓に自分の謠を合せて、めでたく謠ひ納めた。やがて、まだ廻らなければならない所があると言つて、車に乘つて歸つて行つた。

——漱石全集——

一八　日章旗と水戸烈公

木宮泰彦[一]

(一)歴史家、靜岡高等學校教授。明治二十年(一八八七)靜岡縣に生れた。

およそ國旗は國家の標號であるから、その國の歴史を語り、その國の國體を表し、その國の國民精神の理想を示す物でなくてはならぬ。世界何れの國と雖も、國旗の制のない國はないが、我が日章旗のやうに鮮明で純一、端正で雄大なのはない。

徳川齊昭

しかし、我が日章旗が國旗として制定されるまでには、幾多の曲折があつたもので、それに就いても思ひ出されるのは、水戸烈公[二]の功績である。

幾多の曲折

(二)徳川齊昭。

嘉永六年六月米艦四隻が浦賀[一]に來て交通を求めた時、我が國の上下驚愕してなすところを知らず、幕府は水戸の烈公を起して事に與らしめた。その年の九月幕府は烈公の議を用ひ、始めて大船建造の禁を解いた。一度大船建造の禁を解いたのであるから、各藩に於ても、大きな船が漸次建造され、中には蒸氣船さへ造る者もあつた。隨つて我が國に於ても、外國船と紛れない爲に、國旗を制定して船印とする必要が起つた。當時これを國旗とは言はず、總船印と稱してゐた。そこで幕府は有司に命を下し、意見を奉らしめたところ、評定衆は旭日を以て總船印となすべしと論じ、大目附、目附等は中黑を用ふべしと主張し、衆議紛々として、何等決すると

衆議紛々

(一)今神奈川縣(相模國)浦賀市町。横須賀市の東南約八キロメートル。

ころがなく終つた。

翌安政元年五月、再び國旗制定の論が起つて、大目附、目附等は總船印には中黑を用ひ、幕府の旗には日の丸を用ふべしと主張した。當時烈公はこれに反對して、中黑は新田の中黑など稱して、古來源氏の旗印であるのに、これを我が日本國の標號たる總船印に用ひ、日の丸を以て幕府の旗印とするのは、大小輕重を顚倒したもので、その當を得ぬ。苟も國意を代表して威を萬國に輝かす國旗には、日の丸でなくてはならぬ。幕府は中黑を以て印とすべしと論じて、その旨を幕府に建議された。けれども大目附、目附等は前議を固執して動かない。そこで烈公は七月一日再び建議案を奉り、中黑を以て國旗とするの不可を論じ、日章旗の圖まで添へて意見を述べられたので、幕府も遂に烈公の議を用ひ、衆議を排して、七月十一日次の如く發令した。

大船製造に就きては、異國船に紛れぬやう、日本總船印は白地日の丸幟相用ひ候やう仰せ出され候。且また公儀御船の儀は、白紺布交の吹貫、帆中柱に相建て、帆の儀は白地中黑に仰せ出され候條、諸家に於ても白地は相用ひず、遠方にても見わかり候帆印、銘々勝手次第相用ひ申すべく候。尤も帆印は、その家の船にても、かねて書出し置候やう致さるべく候。右大船の儀、平常廻米の外、運送に相用ひ候儀、勝手次第に候へども、出來の上は、乘組人數並びに海路

乘筋、運送方等、なほ取調べ相伺はせらるべく候。右之通相觸れらるべく候」。

かくの如く烈公の努力によつて、我が旗印は光榮ある日章旗と定まつたのである。

後數年を經て安政七年、外國奉行(一)新見正興等が北米合衆國に使し、條約の批准交換を行つた。この時始めて堂々日章旗を飜して、かの國に行つたのであるが、かの國人はその壯烈な意匠を見て、驚歎したといふ事である。

國旗はかくの如くにして定まつたが、その紋章の由つて來つたところは甚だ遼遠である。畏くも皇祖の御名は、天照大神または大日孁貴と申し奉り、大神一たび天の岩戸に隱

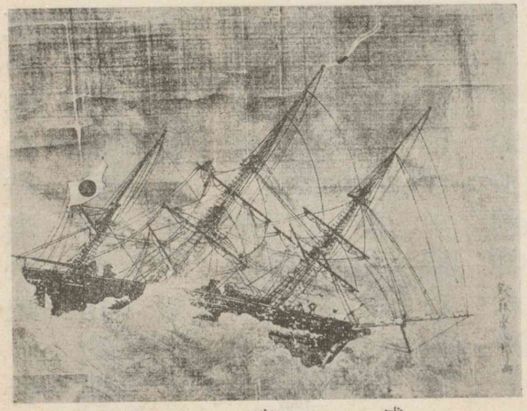
(一)遣米使節。豐前守と稱した。安政六年(二)外國奉行(一)五年九月なり。
意匠　同年七月なり。
遼遠　この國に使した。
新見、村垣淡路守、小栗豐後守等は米國軍艦に乘り、勝安芳、木村圖書等は咸臨丸に搭じた。

晦冥

れさせ給へば、天地爲に晦冥になつたといふのは、天日とその德を等しくし給へる事を物語るのである。隨つて天皇の御位を天つ日嗣と申し、皇太子を日嗣の御子、日並皇子など申し奉つてゐる。聖德太子が小野妹子を隋に遣し給ふや、その國書に曰く、

「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す」。

(一)第三十三代推古天皇に仕へ、同十五年隋に使した。



咸臨丸

と。また曰く、

「東天皇敬みて西皇帝に白す」。

とげにや我が國はアジヤの東方に位し、日出づるところの國である。旭日の輝々たる光は熱烈活動の樣を示し、その眞紅の色は皓潔至誠の情を示してゐる。我が日本の標號とするに最も適するもの、日章を措いて他に何があらう。

——面白い日本歴史の話——

一九　清淨の國

大町桂月[一]

我が國の特質は少からざれども、特質中の特質とも言ふべきは、清淨の國なる事なり。日本國民は一般に清淨の美を愛す。その心清淨なり。その衣、その食、その家清淨なり。その國一體が清淨なり。清淨の美を解せざる者は、到底日本を解す

[一] 文學者。名は芳衛。高知市の人。大正十四年歿、年五十七。

大和魂

るを得ざるなり。

しき島の大和心を人問はゞ
あさ日ににほふ山ざくら花

この歌が日本人一般に愛誦せらるゝは、國民精神の清美を歌ひ出でたればなり。一體、朝は一日中にて最も清々しき時なり。空に些かの曇もなき時、東天に朝日の輝き出づるは、實に清爽なるものなり。その清暉に櫻花中の粹たる山櫻のぱつと映發せるは、なほ更に清々しきものなり。朝、晴天、日の出、山櫻。これだけの好き道具がそろはゞ、何人か爽快を覺えざるべき。これ卽ち大和魂の本體なり。大和魂は卽ち清淨の粹なり。櫻花は散際が潔し。日本男子の死を惜しまざるに似

たりなどと言ふは、枝葉の事のみ。

田子の浦ゆうち出でて見れば眞白にぞ
ふじのたかねに雪は降りける

(一)萬葉集卷三、山部赤人の歌。

綠波一面、鏡の如き田子の浦、そのあなたに何所より見ても形の變らざる扶桑の靈山の、八朶玲瓏天を擎げて立てるは、こもまた清淨の極みにあらずや。この歌が古來名歌として世に喧傳せらるゝも、畢竟この美の琴線に觸れたればなり。

扶桑

喧傳す

月雪の中や命のすてどころ
積雪白うして四邊に聲なく、十四夜の寒月獨り天にさえたり。この夜、この雪を蹈み、この月光を浴びつゝ、氷刃を煌か

(二)榎本其角の句。其角は江戸時代の俳人。寶永江戸の人。(一六六三—一七四五)年、享年七十七。

して亡君の仇を報いんと討入るは、決死の四十七烈士。天も清し。地も清し。人も清し。當夜、吉良邸の隣屋敷にて催されし俳會に列せし其角その人は、元來多血性の快男子にして、清淨の美を身解せる人なり。而して義士の中に加れる大高子葉(一)は、實にその俳友たり。月清きその雪の夜、無量の感慨は發してこの十七文字となる。實によく復讐の眞況と本體とを捉へ得て、清淨の美を極めたりと謂ふべし。

日本の富士
にまつさす
初日哉
桂月

大町桂月筆蹟

(一)名は忠雄、通稱源吾。子葉はその俳號。赤穂四十七士の一人。

心の結晶

歌も、俳句も、名句と稱せらるゝものは、多くはこの清美を捉へたるものなるが、その他の美術、文藝、一つとしてこの心の結晶ならざるはなし。花に對する感じの如きもまた然り。近時、外國趣味の入來るにつれて、妖艶なる草花も輸入せられたれど、梅や、櫻や、蓮や、菊や、水仙や、昔も今も日本國民の一般に愛する花は、必ずや清淨なり。また建築に於ても然り。日光の東照宮、淺草の觀音堂を見る時、我々日本人は唯華麗を感ずるのみにして、尊さを感ずる事薄し。然るに一たび去つて伊勢の神宮に詣でんか、千木高知れる建築、清淨の美を極めて、坐ろに西行の歌のしのばるゝを覺えずんばあらず。若し神宮に向つて壯大を求め、華麗を求むる者あらば、これ眞の日本國民たる素質に缺けたる所ある者と言はざるべからず。

ものゝあはれ

東洋の君子國

滄海の中にありて山青く水清き我が日本は、土地その物が既に清淨なり。開闢以來未だ曾て外國に汚されざる我が歴史が既に清淨なり。他民族の血液を多く混ぜざる我が民族の血統が既に清淨なり。しかのみならず、我が國民は善を好みて惡を憎み、正に就きて邪を排し、直を愛して曲を嫌ひ、弱を扶けて强を挫き、よく忠に、よく孝に、よく義に、よく勇に、風流さへ解して、もののあはれを知れる清淨なる人間なり。我が日本が古來東洋の君子國と呼ばるゝも、宜なるかな。

(一)第百十九代光格天皇の御代。(一二四九年—一二四六〇年)

(二)臨濟宗圓覺寺派の大本山。瑞鹿山と號する。

(三)臨濟宗の僧。伊豫の人。文化三年(一二四六年)寂、七十五。

(四)臨濟宗の高僧。名は慧鶴。駿河の人。明和五年(一二四八年)寂、八十四。諡號正宗國師。

(五)今東京市淺草區藏前片町通。江戸時代幕府の祿米を貯へたあつた藏のあつた町。

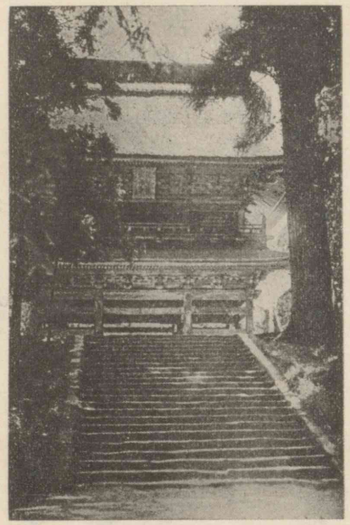
二〇　心の境

今から百二三十年前、(一)寛政の頃に、鎌倉の(二)圓覺寺に誠(三)拙和尚といふ高徳の僧があつた。この人は、(四)白隱禪師と竝び稱せられた近代の名僧である。和尚が高徳であつた爲に、歸依者も新たに加つて來て、寺の普請も出來る事になり、山門の建替なども行はれた。

その頃、江戸淺草の(五)藏前に、大口屋五郎兵衞といふ豪商があつた。これも和尚に歸依した一人で、その普請を機會に、青銅の五百羅漢を寄進して、山門の上に据ゑる事にした。高さ三尺くらゐの像を五百體も造る事であるから、當時の金で

千兩もかゝつたであらう、寄進としては莫大なものと噂された。

愈据ゑつけも濟んだと聞いて、五郎兵衞は寺參かたゞこれを見ようと思つて、鎌倉へ行く事にした。五郎兵衞は腹の中では、勿論この寄進が自慢であつた。「あれだけの寄進をした事だ。寺に取つても大檀那である。きつと大事にしてくれるだらう」と思つて、何日の何の刻頃に參るからと、豫め案内狀を出しなどもした。



圓覺寺山門

定めて迎の者も出てゐる事だらうと思つて、鎌倉に著いて見ると、一向それらしい者も見えない。變だなと思ひながら、圓覺寺の境内へはいつて見ても、やはり小僧一人出迎をしてはゐない。寺なんていふものは氣の利かないものだなと、五郎兵衛は稍不平を感じながら、庫裏へ行つてその名を告げた。

「遠路の御參詣で。」

と言つて、役僧は客間へ案内をしたが、ほんの通一遍の取扱で、別段何といふ事もない。さては案内狀の事がまだ通じてないと見えると五郎兵衛は察して、多少いら〳〵しながら、和尚に面會を求めた。

大喝する

和尚の室へ導かれて、寒暖のあいさつが濟むと、五郎兵衛はすぐにも和尚が寄進の禮を述べてくれるだらうと思つて、今に言出すか、今に言出すかと待つてゐたが、そんな樣子は更に見えない。五郎兵衛はとう〳〵我慢しきれなくなつてしまつた。

「時に今度の寄進の事ですが、あなた方はどう思し召すか存じませんが、商人に取つては、千兩といふ金は大金です。禮を言つて戴かうとも思ひませんが、せめて何とか、滿足に思ふくらゐの事はおつしやつて戴けようかと思つてゐましたのですが。」と、悔しさうに言つた。

五郎兵衛の口上を靜かに聽いてゐた誠拙和尚は、忽ち大

善業を積む

喝した。そして言ふには、

「大口屋五郎兵衛が自身の爲に善業を積んだからといつて、この和尚が禮を言はなくちやならないと言ふのか。」

かう言はれて、五郎兵衛は始めて自身の心掛の間違つてゐたのを覺つた。それから修業を積んで、立派な境涯に進んだといふ事である。

誠拙和尚の心境には、容易に到達する事は出來ないだらう。しかし、其所まで到らなければ、私どもは十分に生得の心の芽を伸す事は出來ない。どうしても力めてその境地に達したいものと思ふのである。

（窪田空穗の文に據る）

（一）歌人。早稲田大學教授。名は通治。明治十年（二五三七年）長野縣に生れた。

二一　自己に忠實なる者

島村民藏（一）

周圍によつて動かされ易い地位にある人、さうでなくても他人に使はれてゐる人、他人の爲に働いてゐる人、不自由な生活をしてゐる人などを、假に境遇上の弱者といふ事にする。

よくない事だと思ひながら、仲間はづれや變人扱にされるのが厭さに、贊成をしたり、調子を合せたり、自分一人が反對をしたが爲に大勢の人から誤解や嘲を受けるのが恐しさに、心にもない行動をしたりする附和雷同の徒。目上の鼻息を窺つたり、他人の顏色を見たりばかりしてゐる阿諛追從の輩。かういふ人間は、境遇上の弱者の間によく見られる。

（一）文學者、劇研究家。明治二十一年（二五四八年）東京市に生れた。

附和雷同の徒

鼻息を窺ふ

阿諛追從

獨立獨行

(一)墺地利。

什器

草案

しかし、何が困難であるかと言つて、生計上の誘惑にうち克つくらゐ困難な事はない。赤貧洗ふが如き窮乏のどん底にあつて、絶えず飢餓や不幸と闘ひながら、自己に對して飽くまでも忠實であり、眞の意味に於て獨立獨行であるといふのは、餘程堅固な意思や志操の持主でなければ、なし得ない事である。

十八世紀の頃、(一)オーストリヤのさる富裕の僧侶が死んで、その家具什器を競賣に附した事があつた。小さな寺院の住職をしてゐた或貧僧が、古い本箱を一つ買取つて、我が家に持つて歸り、説教の草案などを入れて置かうと引出を明けて見たところ、奥の方に大金を入れた嚢が二つもはいつてゐた。この住職は、俸給といつては、やつと家族を飢餓の境から救ふに足るか足らぬくらゐであつたが、根が正直者で、その上、猛烈な誘惑を易々と撃退し得るだけの強い意志の持主であつたので、「これは正當な所得ではない。」と言つて、その二つの金嚢を、元の持主の遺族に、綺麗に返したといふ事である。

行狀

言語に絶する

しかし、この見上げた實例も、飢餓に瀕しても儼として自己に忠實である事をやめなかつた喜多見某の壯烈な行狀に比べれば、遜色がある。

喜多見某は德川初期の或藩の侍であつた。貧窮言語に絶し、妻を離別し、男の兒が一人あつたのを檀那寺にやり、獨身

になつて暮したが、不自由は一向變らない。門を閉ぢて人を避けてゐるうちに、とう〳〵餓死してしまつた。で、役人たちが住荒した家の中にはいつて見ると、見事な槍が一筋、綺麗に拭ひ立てゝ壁に掛けてあり、鎧櫃には見事にをどした黑革の鎧一領に、定紋の前立打つた冑が入れてあつた。その外、陣羽織も、弓矢も、馬具も、「軍用金五十兩何某。」としたゝめた包も、すつかりそろつてゐた。それから腰の物も、革柄で粗末だが、身は水の垂れるやうに研立てゝあつて、しかも銀百枚といふ折紙さへ添へてあつたのである。

折紙

この侍の行は、輕薄な見方から言へば、愚直極るものかも知れない。しかしながら、飢餓の境にあつて遂に武具を賣ら

愚直

心の聲に從ふ

ず、士道を立貫いた鐵のやうに堅固な志操、徹頭徹尾自分の心の聲に從つた勇氣には、全く頭が下るではないか。

拘束

弱者に對して强者がある。權力、金力または腕力に於て優越な地位にある人。他人の頭に立つ人。何等の拘束をも受けずに思のまゝに生活して行かれるやうな幸福な人。かういふ人は、境遇上の强者と看なしてよい。

己に背く

さてこのやうな强者は、弱者に比べてどうであらうかと言ふに、己に背くやうな危險は寧ろ多いと言つてよい。なぜかと言ふに、誰も頭の抑へ手がない、どんな事をしてもどこからも苦情が出ない、抵抗力の全然ない弱者を相手にする。

――かう言つたやうな場合には、氣隨氣まゝにふるまへる

(一)屢ゝローマの危急を救ひ、第二のローマ建設者と言はれた。西紀前三六四年頃歿した。

赫怒する

といふ事、卽ち一見この上もない幸福のやうで、その實極めて不幸なこの事實が、動もすると、自分の心の聲に耳を傾ける事を忘れさせるからである。暴君とか猛將とかいふ者の悲慘な末路は、大抵かういふ點が原因となつてゐる。

古代ローマの武將カミラス(一)が、或時大軍を率ゐて敵の强大な都市を包圍した。するとその地の學校教師が叛いて、生徒一同を引連れてローマ勢の陣營に來て、

「謹んでこれなる兒童等を將軍に獻じます。この人質の爲に、身方は直ちに降參致すでありませう」

と申し出た。そこで悅んで受けると思ひきや、カミラスは赫怒して、不都合な裏切者を敵陣に追返し、可憐な少年少女を

權謀術數

一も二もなく

無事に父母の手に戻してやつた。市民はいたく感激して、直ちに武器を棄てゝ、彼の軍門に降つたといふ話がある。一旦敵となつた以上、どのやうな權謀術數を廻らしてでもこれを倒さねばならぬ。まして敵城の陷落は、急務中の急務である。其所へ天佑のやうな好都合な交渉が申し出されたのであるから、一も二もなく應じて差支なささうなものである。

ところがカミラスは、自己に忠實な人物であつた。良將は己の武德によつて敵を降さうとするが、他人の惡德によつて勝を制さうとはしないといふ自分自身の氣高い理想的要求に從つて、不義非道な惡魔の取引を、斷然拒絕したのである。

(一)支那三國時代の一國。曹操の子曹丕の建國。五代四十六年間續いた。
(二)武皇帝と諡する。字は孟德。建安二十五年(西紀二二〇年)歿。曹操は魏王となつて天子の車服を用ひたが、まだ簒立しなかつた。

小心翼々

絶對の權力

魏(一)の曹操(二)にもかういふ話がある。曹操が或時百姓の難儀を思ひやつて、麥畑を荒す者は死刑に處するといふ嚴重な軍令を發した事があつた。兵士たちは小心翼々として命を守つたが、ふとした事で、曹操の乘つてゐた馬が麥畑の中に駈込んで、散々に荒してしまつた。そこで曹操が愁然として言ふやう、

「法を作つて自ら犯すやうでは、どうして下を率ゐて行かれよう。しかし、自分は軍の統率者だ。殺される譯にはゆかぬ。では自ら罰を受ける事にしよう」。

最後の言葉と共に劍を拔放ち、髮を切ると、それを地上に投げた。「いや、自分は例外だ、絶對の權力があるのだから」などと言つて、卑怯な責任回避をするには、曹操の心は自分自身に對して餘りに正直であつたのである。

人間味

(一)西紀一六三八年—一七一五年。
(二)西紀一一五九年—一六六二年。
(三)ベルギーの國境に近いフランスの要塞地で、歐洲大戰の激戰地。
(四)西ヨーロッパ北部の故國。今はベルギーの一部となつた。古くから織物業が盛であつた。

責任回避

それから、かういふ人間味のある話がある。フランスのルイ十四世の治世に陸軍卿をしてゐたファベル(一)といふ將軍が、或時セダン(三)の城塞を守つてゐた。彼の指揮する軍隊は大層規律が嚴重で、土地の者に少しも迷惑をかけなかつたので、人民たちが大いに德として贈物をしようとするが、その都度斷られるばかりであつた。

ところが或時、ファベルがパリへ出掛けたので、此所ぞとばかり彼等は、精巧美麗なフランドル(四)製の錦繡を夫人に贈つた。勿論すぐ返されてしまつたのである。其所で持餘され

た錦繡は公賣に附せられたが、誰も買ふ者がない。將軍がその事を聞込むと、「元來好意を以て贈られたのを、受けなかつた爲に、地方人が損失を蒙るのは氣の毒だ」と言つて、內證で手を廻して、この錦繡を高價で買取つたさうである。

自己の立場を守る點に於て飽くまでも強いと同時に、相手の立場を察してやる點に於て飽くまでも優しいこの將軍のやうな人間味の豐かな人格者は、少からうと思ふ。

(一)江戸幕府の儒官。名は直清。江戸の人。享保十九年(一七三四年)、七十七歳。

(二)第百八代後水尾天皇から第百九代明正天皇の御代。

(三)忠直のこと。家康の第二子。秀康の子。大阪夏の陣に發奮して先登の功があつたが、放縱で國務を顧みず亂行に陷つたので、後流された。

二二　杉田壹岐

室鳩巣

寛永の頃、(一)越前故伊豫守殿の家老に杉田壹岐といふ者あり、もとは足輕なりしが、その身の材をもて微賤より登庸せられ、厚祿を受け、國老に列しけり。伊豫守殿參勤にて一年在江戸のうち費用過分なりしを、常に前年よりしたくして、用度足るやうにしけるは、偏に壹岐が功なりしとかや。それはさる事にて、常に顏を冒し直言して君の過を匡救する事を忘れず。

登庸

顏を冒し直言す

過を匡救す

或時伊豫守殿在國にて鷹狩し、晡時に及びて歸城あり。家老どもに對して、「今日若者どものはたらき、いつにすぐれて見えき。あれにては萬一の事もありて出陣すとも、上の御用にもたつべしと覺ゆるぞかし。其方どもも承りて、何れも喜び候へ」とありしかば、家老ども何れも、「御家の爲何よりめでたき御事にて候」と言ひしに、壹岐一人末座にありけるが、默

晡時

默としてゐたりしを、何とぞ言ふかと暫く見合せられしが、こらへかねられ「壹岐は何と思ふ」とありしに、その時壹岐「只今の御意承り候に、憚ながら慨かはしき御事に存じ候。當時士ども、御鷹野などの御供に出で候とては、さきにて御手討になり候はんも計り難く候とて、妻子に暇乞して立別れ候と承り候。かやうに上を疎み候うて思ひつき奉らず候うては、萬一の時御用に立つべしとも存ぜられず候。それを御承知なく、たのもしく思し召さるとの御意こそ、愚かなる御事にて候へ」と言ひしかば、伊豫守殿大きに氣色損じければ、何がしとかや言ひし者、伊豫守殿の刀持ちて側にゐたりしが、壹岐に「座を立ち候へ」と言ふ。壹岐聞きて、その人をはたと睨み、「何れもは御鷹野の御供して、猪、猿を追うて駈廻るを御奉公とす。この壹岐が奉公はさにてはなし。いらざる事申し候な」とて、そのまゝ脇差を拔いて後へ投捨て、伊豫守殿の側に進み寄り、「唯御手討にあそばされ候へ。空しくながらへ候うて、御運の衰へさせ給ふを見候はんよりは、只今御手にかゝり候はゞ、せめて御恩を報じ奉る志のしるしと存じ候はん」と言ひて、頸を延べて平伏しけるを見給ひて、何とも言はで、奥へ入られけり。

氣ささを折る

そのあとにて、前の家老ども壹岐に向ひて、「御爲を思ひて申されしは尤もにて候へども、をりもあるべき事にて候。今日御鷹野より御機嫌にて御歸りありしに、御氣さきを折ら

れ候事は、遠慮もあるべき事にこそ」と言ひしを、壹岐「君へ諫を申し上げ候に、御機嫌を考へ候ひては、よきをりとてはなきものにて候。今日はよきついでとこそ存じ候へ。その上某事は、御取立の者にて候へば、各とは譯の違ひたる者にて候。御手討にあひ候うても、その分の事にて候」と言ひければ、諸家老各感じ合ひけり。

糟糠の妻

さて家に歸りつゝ、切腹の用意して君命の下るを待ちけるが、日比糟糠の妻のありけるに向ひて、「そこ許に言ひおく事唯一つあり。御身は女の身なれば、ぢきに御恩を受けたるにてはなけれども、我御厚恩を擔ふ故に、足輕の妻と言はれし身が、今歴々の妻とて、大勢の所從に圍繞せらるゝは、限り

歴々

なき御恩にあらずや。然れば我生害仰せ附けられし後にても、唯朝夕、今までの御恩の有難かりし事を忘れずして、かりにも上を怨み奉る心あるべからず。若し女心にて、我が身のものうきにつけて、上を怨み奉るやうなる事を言葉の末にも露おきなば、黄泉の下までも深く怨と思ふべし」と言ひけり。

黄泉の下

さて今やと待ちけるに、夜更くる程に人來て門を敲きしが、「召あるまゝ登城すべし」となり。さてこそと思ひて登城しけるに、すぐに寢所に召入れて、「その方が晝言ひし事心に掛りて寢られぬ間、夜陰なれども呼びつるなり。我があやまりたる事は、とかく言ふに及ばず。その方が志を深く感じ思う

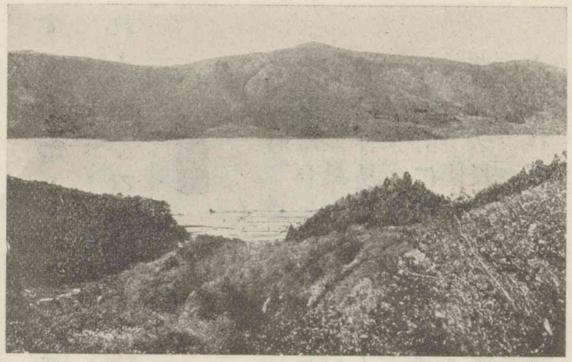
て滿足す」との事にて、ぢきに腰の物を賜はりしかば、壹岐も思ひも寄らぬ事にて、覺えず涙に咽びつゝ、拜賜して罷り出でけるとぞ。

これにつけても思ひ出づるは、同じ越前家の話なり。(一)秀康封に就きし後、阿閉掃部といへる武功の譽ありし者を、厚祿にて召抱へられけり。その頃、狛伊勢とて世祿の歴々なりしが、嫡子の鎧著初の式に、掃部を請待して、當年の武功の物語を望まれければ、掃部默し難く、「さらば某一生のうちに、武者ぶりの見事なる士を一人見申して候。その事を話し申すべし。江州賤ヶ嶽(二)の戰に、暮方に某一騎、(三)余吾の湖のわたりを引返し候ひしに、敵と思しき者うしろより聲を掛け、『御不承ながら御相手を』と進み寄り候故、こなたも望むところと、互に馬を乘放ち、既に槍を合せんとしけるに、その人『しばし御待ち候へ。今朝よりの戰に我が槍よごれて候まゝ、洗ひてこそ。』と申し、湖水に槍をうち浸して二三遍洗ひつゝ、『さらば。』とて突合ひしが、久しく勝負なかりし程に日も暮果てければ、彼方よりまた聲を掛け『もはや槍先も見えず候。御殘り多くは候へども、これまでにて候。御暇申し候べし。御名こそ承りたく候へ。某は青木新兵衛と申す者にて候。』とて、某が

(一)關ヶ原役後、越前の領主となつた。(慶長二年)(二)萬石(二)十七年年)(三)十四年)

(二)滋賀縣伊香郡大音村字大音の西方に賤ヶ嶽(天正十一年)(二)羽柴秀吉が柴田勝家を破つた戰。

(三)伊香郡余吳村の西、賤ヶ嶽の東北麓にある。



余吾の湖

名をも聞き、互に後日を約して立別れしが、これ程見事なる武士は終に見侍らず」と語りけり。をりしも伊勢が許に出入する方齋といへる浪士こそ、かの新兵衛にてありければ、これも厚く召抱へられけりとなん。

——駿臺雜話——

(一)劇作家。明治二十三年(二)(二五〇年)岡山縣に生れた。
(二)第百八代後水尾天皇の御代。
(三)家康の侍女。武田氏の臣飯田筑後某の女。
(四)淺井長政の女。名は茶々。秀頼の母。元和五年(二二七)大阪落城に際し自刃した、年四十九。
(五)秀頼の臣。元和元年大阪夏の陣に戰死した、年四十六。
(六)秀頼の臣。大阪夏の陣に戰死した、年二十一。
(七)黒田孝高並びにその子長政の臣。大阪夏の陣に豐臣方の臣。年四十六。

自修文

木村重成

額田六福

慶長十九年大阪冬の陣の時、城中の將士が勇敢に戰つたので城は容易に落ちさうもなかつた。そこで德川家康は阿茶局を淀君の許に遣して、僞つて和睦を申し込んだ。眞田幸村、木村重成、後藤基次、長曾我部盛親などの勇士たちは、一致してこれに反對したけれども、恐しい戰を眼の前に見て怖氣のついた淀君は、どうでも和睦すると言張つた。そして諸將を出しぬいて、今後決して

(一)額田六福。
(二)慶長十九年。
(三)おちやのつぼね。
(四)淀君。
(五)眞田幸村。
(六)木村重成。
(七)後藤基次。
(八)元和元年大阪夏の陣に戰ひ、德川方に捕へられて刑せられた、年四十一。
(九)長曾我部盛親。
(十)大阪方に屬して豐臣方に屬して戰死した。
(一)長門守。
(二)秀吉の第二子。元和元年大阪落城に際し自刃した、年二十三。
(三)ぢき〳〵に。直接に。

再び戰爭はせぬといふ互の誓紙に血判をする事まで、約束してしまつた。

もう何事も終りである。この上は立派に家康の血判を取つて、大阪方の威勢を落さぬやうにするより外はない。しかし、何十萬といふ敵軍の眞直中へ一人乘込んで、しかと家康が血判をする樣子を見定め、さてその誓紙を受取つて來るのは、實に容易ならぬ難事である。使者は誰にしようとさま〴〵評議した末、長門守がよからうといふ事に衆議一決した。

「いや、拙者などに何として……」

重成は一應斷つたが、秀頼からもぢき〳〵に「頼む」と言はれたので、とう〳〵お受けした。二十歳の重成は、もう死ぬ覺悟を定めたのであつた。

重成は十二月二十二日の朝、手水を使つて恭しく豐太閤の靈

(一)大阪市天王寺區茶臼山町の天王寺公園内にある。
(二)郡良列。當時主馬頭であつた。
(三)京極高次の妻。淺井長政の次女。
(四)井伊直孝。德川氏の武臣。萬治二年(一六五九年)歿、年七十。
(五)本多正信。佐渡守と稱した。元和二年(一六一六年)歿、年七十九。
(六)大久保彦左衞門。德川氏の武臣。無欲、奇行をもつて名高い。寛永六年(一六二九年)歿、年八十。
(七)榊原康勝。康政の第三子、元和元年(一六一五年)歿、年二十六。

に祈り、新しい烏帽子、直衣を著け、悠々と白馬に跨がつて、茶臼山の家康の本陣へ向つた。副使の郡主馬と、淀君の妹の常高院とが隨つた。稍城を離れるともう德川方の陣所で、何萬とも知れぬ將卒が、槍や刀を林のやうに立連ねて、おどかすやうに道の兩側に並んでゐる。しかし重成は微笑を含んだまゝ通り過ぎた。

茶臼山の本陣は一層警戒が嚴しかつた。井伊、本多、大久保、榊原などの勇士たちが、綺羅星のやうに並んでゐる。けれども重成は眉すら動かさず、さながら無人の境を行くやうに、平然と家康の前へと進んだ。

「あいや大阪の御使者」

餘りにそれが心憎かつたので、井伊掃部頭は呼掛けた。

「拙者は井伊掃部頭で御座る。お見知り置かれい」

太い聲で威壓するやうに言つた。

やうに見事に並んで居る。
無人の境を行く　邪魔者もなくどん〳〵行く。
平然　平氣。
あいや　呼掛の言葉。

重成はじろりとその方を見やつた。見やつただけで、言葉一つ返さなかつた。

「拙者は大久保彦左衞門ぢや」

重成はもう見向きもしなかつた。そして、つとすべるやうに、家康の前一二間程の所まで進んだ。それは餘り近かつたので、

「あいや長門殿、それは餘りに無禮で御座らう」

本多佐渡守は思はず刀の柄に手を掛けて、呼止めた。

「すはつ」とばかり、並みゐる諸將も一度に色めき立つた。けれども重成は見返りもせず、家康に向つて言つた、

「いざ、誓紙血判頂戴仕る」

「むゝ」

家康はじつと重成を見詰めてゐたが、やがて硯を引寄せて、すらすらと誓紙をしたゝめ、小柄を拔いて小指の腹に刺して、血判

色めき立つ　緊張の餘り顏色が變る。
小柄　脇差の鞘に添へて挿す小刀。

文言云々　書いてあることをだまつて讀んだが。

きつと　きびしい顏付で。

雨となるか云云　どんな騷ぎになるかもわからない、無氣味な有樣になつた。

をした。

阿茶局は恭しくそれを捧げて、重成に渡した。

「はゝつ、有難く頂戴仕る」

重成は恭しく受取つた。そして一通りその文言を默讀したがやがて最後の血判の所まで見て行くと、きつと顏を擧げて、家康を見詰めた。

「恐れながら、御血判が薄くて見えかねまする」

と言つて、阿茶局に突つ返した。

「何つ」

流石の家康もさつと顏色を變へた。諸將たちは言ふまでもなかつた。

雨となるか、嵐となるか、凄愴の氣があたりをこめた。

「いえ『御判少々見えかねる。』と長門守が申しまする。恐れながら

もう一度押直して下さりませ」

それと見た常高院は、女だけに優しく言つた。それで家康も心が解けたと見えて、

「どれ〳〵。成程。年が寄ると、どうも血の氣が薄くて困る」

とつぶやきながら、改めて指を切つて、しかと判を押しかへて、重成に渡させた。

「有難く存じまする」

重成は改めて厚く禮を述べ、誓紙を文箱に入れて、家康の前を下つた。そして先刻の勇士たちが並んでゐる所へ來て、

木村重成（增山隆方筆）

「最前は秀頼公の名代故失禮仕つた。無禮の段平に御容赦下されい。」

と、禮儀正しく詫びた。

「や。」

徳川方の諸將は先を越されて、急に返事も出來なかつた。やうやうそのうちの伊奈筑後守が、

「御念の入つた仰せ、匆々お通りめされい。」

「御免。」

重成はにつこり笑つて、悠然と式臺から馬に跨がつた。

「あゝ健氣な若武者だ。秀頼公はよい家來を持つた。」

家康は後でさう言つて、心の奥底から重成を褒めそやした。

最前　さつき。
名代　代理。
先を越される　先手をうたれる。
式臺　玄關の前に設けた板敷。
褒めそやす　盛にほめる。

二三　我が袖の記

高山林次郎[一]

熱海の冬

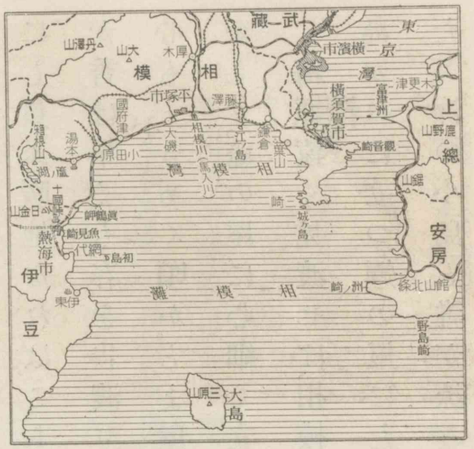
熱海[二]のふた月は誠に樂しき哀れ深き冬の暮しなりき。

よそならば吹雪に閉ぢられて、日影も薄き冬の眞中も、名にし負ふ暖地なればこち吹く風も寒からず。むつき初の梅が香は早くも春を告渡りて、野邊の燒跡の萌初むるは、人の心もときめく頃か。とま屋どもに岩海苔のかをりせるもをかしく、蘆の屋に心細く立昇る煙も長閑なりや。

海原遠く見渡せば、相模、安房の山々、雲か霞の姿面白く、大島がねに立つ煙の風にたなびけるに、水や空とも分ちかねたり。「沖の小島」と誰が詠みたりし、初島わたり漕ぐふなうた

(一)評論家、思想家、文學博士。樗牛と號した。山形縣の人。明治三十五年(一九〇二年)歿、年三十二。
(二)靜岡縣(伊豆國)熱海市。
むつき
心ときめく　とま(苫)
(三)「箱根路をわが越えくれば伊豆の海や沖の小島に波の寄る見ゆ」源實朝、續後撰集
(四)熱海の東南海上十二キロメートルにある小島。

(一)熱海市の南端。
(二)熱海市と函南村との境にある。高さ七七四メートル。
(三)日金山の絶頂。天空海闊
(四)平安時代にあつた關所。遺址は靜岡縣庵原郡興津町にある。



の寄る浪毎に聞ゆるもゆかしく、魚見ヶ崎のこなたより渚を傳うて、砂白く松青きほとり、濱千鳥の群れとぶ樣もいとをかし。後には日金、十國の山々を負ひ、前には天空海闊の間に一灣の春を擁する豆南の風光は、筆にはなかなかに及び難し。

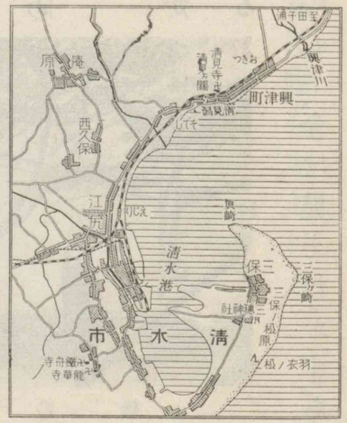
三保の春

松風遠く吹きあはせて波の音も幽なる、物思まさる夕べなりき。我獨り清見ヶ關の宿を立出でて、三保の松原に遊ぶ。入

(一)靜岡縣清水市の一部。
(二)清水市。
(三)清水市村松にある。日蓮宗。境内に稀牛の墓がある。

日の影は雲にのみ殘りて、月未だ上らず。田子の浦曲の夕なぎに、千鳥の聲もいと稀なり。江尻、清水をはや過ぎて、龍華寺の輪塔を右手に見つ。袂に寒き山おろしに入相の鐘を吹送りて、初春の哀れ一入深し。三保にたどり著ける頃は月漸く上り、清見潟の水煙は關路遙かに立籠めて、富士の高嶺に雪の色白し。見渡せ

龍華寺



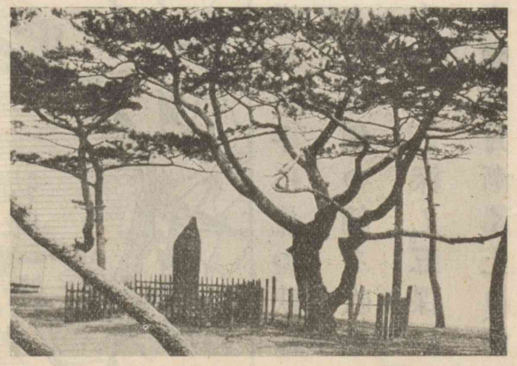
ば一帶の松林、木深くも生ひしげれるかな。木立のふるへる月の明りに殘んの雪の色さえて、杜の下路杳かなる、霞に落つる影もなし。

波の音漸く近くして、我は羽衣の松に添うて立ちぬ。羽衣の松は我が年久しく思ひこがれしものなりき。よしさらば今宵は月と共に立ちあかさんかな。

松は早く枯れて、幹の朽ちたるが殘れり。そのもとにゆかりを誌せると思しき石ぶみあれど、月の光朧にして、今は見えわかず。あ

(一)三保の松原の中程にある。

石ぶみ



羽衣の松

はれ、波の音と松風とのみぞ、今も昔に變らざりける。

——樗牛全集——

一四　ふじの山（狂歌）

宿屋飯盛(一)

歌よみは下手こそよけれ天地の
うごき出してはたまるものかは

大屋裏住(二)

うぐひすも蛙もおなじ歌なかま
經よむもありたゞなくもあり

鹿都部眞顏(三)

あらそはぬ風のやなぎの絲にこそ
かんにんぶくろぬふべかりけれ

(一)國學者、狂歌師。姓は石川、名は雅望。本天保元年（一七九〇年）歿、年四十八。

(二)本名久須美孫兵衛。江戸の人。文化七年（一八一〇年）歿、年七十七。

(三)本名北川嘉兵衛。狂歌堂と號した。江戸の人。文政二年（一八一九年）歿、年七十八。

(一)江戸の狂歌師。俗に大阪屋甚兵衛。文化四年(一八〇七)歿。

(二)本名大田覃。南江戸幕臣。蜀山人又は號した。文政六年(一八二三)歿、年七十五。

ほとゝきす
鳴つるかけは
はみえねと
もきいた證
據は有明の
月　蜀山人

(三)本名立松懐之。東蒙と號した。江戸の儒者。寛政元年(一七八九)歿、年六十四。

四方赤良筆蹟

馬場金埒(一)

雪ならばいくら
酒手をねだられん
はなのふゞきの
志賀のやまかご

四方赤良(二)

さわらびがにぎり
こぶしをふり上げて
山のよこつら
はる風ぞ吹く

平秩東作(三)

ゆく春をおもひ
きれとや舞臺より

(一)清水寺。京都市東山區にある。法相宗。

(二)本名岸宇右衛門。江戸の人。寛政八年(一七九六)歿、年四十三。

(三)本名山崎景貫。江戸幕臣。寛政十二年(一七〇〇)歿、年六十三。

(四)田安家の士。本名小島源之助。江戸の人。享和二年(一八〇二)歿、年六十。

とんで見せたる清水(一)のはな
ほとゝぎす自由自在にきく里は
酒屋へ三里豆腐屋へ二里

つむり光(二)

ほとゝぎすなきつるあとにあきれたる
後徳大寺のありあけのかほ

四方赤良

天のはら月すむ秋をま二つに
ふりわけ見ればちやうど仲麿

朱樂菅江(三)

菜もなき膳にあはれは知られけり
しぎやきなすの秋のゆふぐれ

唐衣橘洲(四)

(一)本名榎並善八。油烟齋と號した。大阪の人。享保二十年(一七三五年)歿、年八十。

(二)一向宗の僧。大阪の人。安永二年(一七七三年)歿、年六十四。

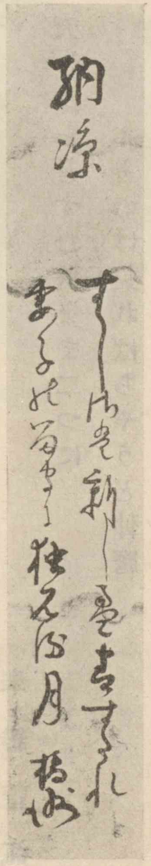
(三)通稱又左衛門、號乾堂。江戸の人。寛文九年(一六六九年)歿、年八十餘。

納涼

すゝしさは新し疊青すたれ妻子の留守に獨見る月　橘洲

果報

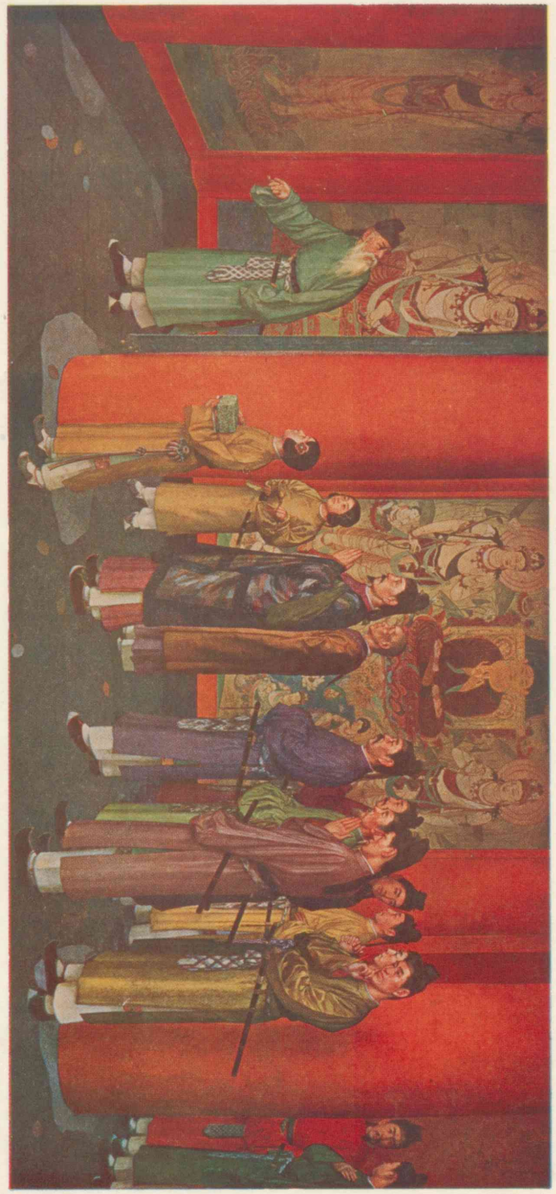
ふじの山ゆめに見るこそ果報なれ路銀もいらずくたびれもせず　(一)鯛屋貞柳



唐衣橘洲筆蹟

世の中をなんのへちまと思へども ぶらりとしてはくらされもせず　(二)栗柯亭木端

まじらへば七重の膝を八重にをる 袴のひだのむつかしの世や　(三)石田未得



聖徳太子　筆作　狩田和

(一)思想家。明治八年(一八七五)新潟縣に生れた。
哲人

(二)第三十三代推古天皇の十二年(一六四)四月に定められた。
基調

(三)推古天皇の十一年(一六三)十二月に定められた。十二階とは大德、小德、大仁、小仁、大禮、小禮、大信、小信、大義、小義、大智、小智。
人材登用
閥族跳梁

二五　哲人聖德皇太子

高島米峯

私の最も崇敬する偉大な哲人を過去に求めて、私は先づ聖德太子を擧げざるを得ない。聖德太子の偉德鴻業は山の如く高く、海の如く廣く、到底筆紙の能く盡すところでないが、憲法十七條を定めて平和の理想を宣言し、この理想實現の爲には、佛教の信仰を以て國民の精神生活の根本基調とする事の切要なのを認め、更にこれによつて、天皇中心主義を闡明して、建國の精神を振作し、また冠位十二階を定めて人材登用の門を開き、以て閥族跳梁の弊を一掃して、內政を充實し給うたので、日本の面目は玆に全く一變するに至つたのである。たゞにそればかりでなく、當時世界の最大强國

として、最も文化の進化した支那――支那は恐らく日本をその屬國くらゐにしか考へてゐなかつたであらう程、それ程日本の世界的地位は低いものであつた。――と對等の國交を結ぶ事になつたといふのは、實に聖德太子の偉大性の、いかに驚くべきものであるかを看取せしめられるのである。

聖德太子は推古天皇の十五年に遣隋使發遣の事を決定し給ひ、(一)小野妹子が使節に任ぜられて、その年七月に出發した。この年は隋(二)の煬帝の大業三年で、妹子が煬帝に差出した國書の冒頭には、「日出づる處の天子、書を日沒する處の天子に致す。恙なきや」とあつて、實に堂々たるものであつた。從來

(一)近江國滋賀郡小野村にゐたので小野と稱した。
(二)胡族を統一して建てた支那の國號。三主二十八年で唐に滅された。(西紀五八九年―六一八年)

冒頭

支那は自ら中國を以て任じ、東夷、南蠻、西戎、北狄と四方の國國を野蠻國扱にしてゐたので、日本の如きもいはゆる東夷のうちの一つくらゐに考へてゐたのであらうが、その日本から、突如としてかうした對等の禮を以て書を贈られたので、煬帝は甚だ不快に感じ、一度はこれを却けたのである。しかし、これ程の國書を差出す國は、一體どのくらゐな文化をもち、國民の生活がどのくらゐ進んでゐるか、ともかくもその實情を知る必要があると思つたのであらう、(一)裴世清といふ者を使者とし

聖德太子

(一)推古天皇の十六年(一二六八年)隋使として來朝した。

て我が國に遣す事となり、裴世清は小野妹子と共に、翌年四月難波に著いたのである。この隋使裴世清の報告が、日本を隋と對等のものにするか、それとも依然として屬國扱にするかといふ最も重要なものであつたので、聖德太子はその待遇に就いては頗る御心をお籠めになつたらしい。先づ朝廷では飾船三十艘を以て一行を難波の江(一)口に迎へさせ、難波の新館をその旅館に充てゝ、優遇到らざるなく、また彼が都に入る時には、飾騎七十五匹を以てこれを大和の海石榴(二)市の衢に迎へ、天皇の謁を賜ふ時には、有司百官が定められた冠位に隨つて、綺羅星の如く宮廷に居並んだので、流石の裴世清も、すつかり感服してしまつたらしい。その結果、彼が

(一)淀川の河口。

(二)磯城郡。今三輪町大字金屋の内。

歸國する時、第二回遣隋使として再び小野妹子を遣す事となり、その時妹子の持つて行つた國書は、これもやはり太子の筆に成つたもので、實に大文章であつた。流石の隋の煬帝も、裴世清の報告やら、かうした堂々たる二度の國書やらで、もう否應なしに、對等の國交を結ばなければならない事になり、隨つて支那は、日本を完全な獨立國として、認めなければならなくなつたのである。これ實に聖德太子の理想の一面が、遺憾なく實現したのであつて、我が國が金甌無缺の國體を維持して今日に至り、更にその天壤と共に窮りなきを期し得られるのも、これ等に淵源するところが頗る多いのである。

否應なしに

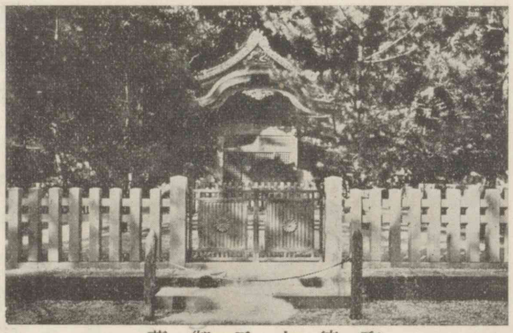
聖德太子の御事業は、右に述べた外、外國文明の輸入でも、美術工藝の奬勵でも、歷史の編纂でも、憲法の創制でも、冠位の制定でも、曆法の研究でも、何一つとして偉大でないものはないが、その中でも最も重要なものは卽ち天皇中心主義の徹底、最も意義あるものは卽ち佛敎の興隆、最も花やかなものは卽ち日隋對等の國交であつて、これ私が哲人として崇敬し讚歎し奉る所以なのである。

開闢

惟ふに日本開闢以來、皇太子で攝政の大任を帶びさせられた方は、僅かに御三方しかましまさぬ。しかもそのうちの御二方が、共に二十代の青年でこの大任を帶び給うたといふ事は、現代學生の最も尊い龜鑑でなくてはならない。その

龜鑑

いはゆる攝政皇太子の御三方と申し上げるのは、推古天皇の攝政皇太子聖德太子、(一)齊明天皇の攝政皇太子中大兄皇子(二)、及び今上陛下卽ち前の攝政皇太子裕仁親王殿下にましまし、聖德太子は二十歲、中大兄皇子（後の天智天皇）は三十歲の御時に、そして私たちの敬愛し奉る前の皇太子殿下は二十一歲の御時に攝政の大任を帶びさせられる事となつたのである。



聖德太子御墓

聖德太子攝政の時代にも、中大兄皇子攝政の時代にも、日本が內に充實し外に躍進したといふ事實から考へ合せて、ど

(一)第三十七代。
(二)第三十四代舒明天皇の皇子。

聰明英邁

うしても昭和の日本もまた、我が聰明英邁にわたらせられる今上陛下の御威德によつて、更に一段と内に充實し外に躍進すべき事を、確信せざるを得ないのである。

天皇中心主義

帝國讀本　改制新版　卷四　終

大正十四年二月十二日印刷
大正十四年二月十四日發行
昭和五年二月八日訂正再版發行
昭和六年八月十日訂正三版發行
昭和六年十二月十日訂正四版發行
昭和九年七月四日訂正五版發行
昭和九年十月三十日訂正六版發行
昭和十二年六月二十五日訂正七版印刷
昭和十二年六月二十八日訂正七版發行
昭和十二年十二月十三日訂正八版印刷
昭和十二年十二月十六日訂正八版發行

定價　卷一—卷九　金六拾錢
卷十　金五拾五錢

帝國讀本　改制新版

編者　芳賀矢一
訂補者　上田萬年
同　長谷川福平
發行者　合資會社　冨山房　東京市神田區神保町一丁目三番地
代表者　坂本嘉治馬
印刷所　東京印刷株式會社　東京市深川區白河町四丁目一番地

發行所　合資會社　冨山房
東京市神田區神保町一丁目三番地
電話神田二一七一—二一七八番振替口座東京五〇一番

千早ぶる
神の代もきかず
龍田の川の
唐くれなゐに
水くくるとは

二ノ二

道藤治郎

鈴木三郎